龍と共に

リツ&ルア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
龍と共に

【Ｎコード】
Ｎ５１５１Ｖ

【作者名】
リツ＆ルア

【あらすじ】
風を操る魔術師、風霊使い
水を操る魔術師、水霊使い
炎を操る魔術師、火霊使い
地を操る魔術師、地霊使い
闇を操る魔術師、闇霊使い
光を操る魔術師、光霊使い

彼女らと隠された霊使いが出会ってしまう

隠された霊使い、その名は……

第1話（前書き）

遊戯王ＧＸ～神の悪戯～を書いていました者です。
（今は休憩していますが……）
その主人公が出てくるかもしれないので、
その小説を読めばこの小説の理解度が上がると思いますのでどうが
そちらも目を通してもらえれば幸いです。

前書きはこんなものにしておいて、ではどうぞ！

第1話

視点　？

「へぇ、ここってデパートが多いわね
ウィンの誘いで来たけど、結構面白いから来てよかったわ」

「でしょ、エリアがそう言ってくれてよかった
ヒータやアウスは？」

「「横でダルクとライナがイチャイチャしててウザい！！」」

「ふっ、僕がリア充っていて嫉妬しているのかな
これだから非リア充達は困るんだ」

「ダルクのいう通り、私たちが付き合った時からうらやましそうな
目で見てくるもんね
思い出した途端笑いが止まらないよ……プププ」

「「こいつら果てしなくウゼェェェ！！！！」」

えーと、ゲームでよくあるナレーションをするね
まず私はウィンだよ
で横に歩いているのがエリア
後ろで歩いているのがヒータとアウス
その横で人目を気にせずイチャイチャしているのがダルクとライナ
ちなみに、ダルクとライナは兄妹だよ
今いるところは有名なデパート街、新しく作られた都市の中にある

んだよ
山があるところを切り開いて作ったらしい
近くに１つだけ山があるのだけど、それはその山の持ち主が山をわたさなかったからだってさ
結構大きい山、大きさでいうとこの新しい都市がまるまる１つ入るくらい大きいよ
この都市を地図で見たらだいぶ大きいから、もしわたしていればこの倍の大きさになっていたのにね

「お～い、ウィン聞いているの？」

あれ、エリアが話しかけているどうしたのかな？

「ウィン、どうしたの？呼びかけ２８回くらいしたのだけど……」

「どうしたも、こうしたも、ただナレーションしていただけだけど？」

「……はぁ、またわけわからない事していたのね……」

あれ？エリアにあきれられた？

「なんであきれているの？　というような目で見ているわね……
そりゃ、何回もわけのわからない事を会い始めてから今までずっとされると流石にあきれるわよ」

「エリアいうだけ無駄だぜ
そんな天然なところがウィンらしいからな
ウィンから持ち味をとったら何もなくなって、ウィンじゃなくなるぜ！」

「ヒータ軽くウィンを侮辱しています
ウィンは天然じゃないとダメだけど
まぁ、天然じゃなくなったウィンも見てみたい事も一理ありますね」

「アウスも人の事いえねーじゃねーか！！」

ヒータとアウスが言い合いになっちゃった
エリアがまたあきれている

「はぁ、ウィン天然もほどほどしておかないとひったくりに合うかもしてないわよ」

「そんな事ないよ！！
私こう見えてもちゃんとしてんだからね！！」

「げへっげへっ少女がいるげへっげへっ
このかばん貰うからなげへっげへっ」

変なおじさん……全身裸！？
……あっ、かばん盗られた……

「ほら、言わんこっちゃない……」

「エリアが死亡フラグ立てるからだよ！！」

「そ、そんな涙目で上目づかいしないで！！
わ、分かったわよ私も追いかけるわよ
ヒータやアウス達も行くわよ！！
ダルクもライナもイチャイチャしない！！」

ヒータたちがしぶしぶついてくる
私のかばんをとった人どこかな？

視点　？

人ごみか……ウザい
近くにこんな都市作りやがって

「げへっげへっそこの奴のけ邪魔だ！げへっげへっ」

こんな変な奴がわいてくるから都市はいやなんだ
このムカつきこっちに近づいてきた変態（あいつ）にぶつけるか……

まずは右足の膝（ひざ）を腹にいれ
よろめいたところを左手の拳を顔面にいれる
その次に倒れたから右足がまだ地面についてないから変態の腹に落とす
そのまま足を上下に動かせばいいか

「おえっ、もうやめてくれ……」

この声ウザいな顔面けるか……
うん？手に持っているかばんなんだ？
拾うか……
届かん足を動かしながらじゃ無理があったか
いったん止めかばんをとって……これ女物じゃね？
変態（こいつ）こんな趣味があったのか

「今のうちに逃げる」

「…させるか変態」

後ろからドロップキックっと

はぁ、そろそろこいつの相手するの面倒になってきたな

とどめさすか

「…術式３５番　武器召喚術－アームズ・ホール」

呪文を唱えると左手の近くに武器庫にへと繋がるワームホールができる

そこから……ランスでいいか

「…俺の目障りとなったことを後悔するんだな」

そのまま心臓へふりおとす……はずが

「あ、私のかばん」

拍子抜けた声によってやる気がなくなった

「…これの事か？

興味ない、違うくても受け取っておけ」

そういい投げつける

俺がどうかどうかと言われると面倒だ

コレに乗って帰るか

コレとはスケボーだ
ただのスケボーではないが……
車以上の速さのスピードが出る
圧縮空気で動くから、空気が無くならない限り必要資源は無限だ
作ったのは俺だし、誰にも作り方を教えてないから世界に１つだけだ
まぁ自慢話はこのへんにしておくか

「あ、あの……」

なんか聞こえたような気がしたが無論無視
『…違うかばんだったか？
なら貰っておけ』
とでも答えるのも面倒、はぁ、家に帰るか
その前に、家の近くで今日もまた、わいているゴミを掃除しないとな

視点　ウィン

あ、行っちゃった
お礼も言えなかった……

「ウィン見つかった？って持っているじゃない
あそこに盗った人倒れているけどウィンが殺ったの？」

「うんん、親切な人が返してくれた
お礼を言いそこねっちゃった……」

「それだったらどこかまわろうぜ！！
ってそんな涙目&上目づかいでみるな！！破壊度たけーんだ！！

分かった分かった一緒に礼を言いに行くために探せばいいんだろ！！」

「エリアは？」

「はぁ、分かったわよ
アウスとイチャイチャしているそこの2人いくわよ
それから涙目で上目づかいをやめなさい
私がおかしくなるから……」

さてどこにいるのかな？

視点　？

家がある山について、ゴミの数は
はぁ今日もまたウジャウジャとわいている
まぁ、日課となるほどやっているのだが……
仕方ない今日も殺(や)るか

「…ベビーもう出てきていいよ」

コートの中に隠していたベビードラゴン通称ベビーが出てきて僕の肩に乗る

「…数はザーッと数えて１００を超えて２００強か……
いつもより少ないがだるい
さっさと終わらせるとするか……」

手に持っていた杖の端……ドラゴンの頭の形をした物がついている
その中に手を持つところがあるのでそこを右手で持つ
そして、左手を真ん中らへんの場所でつかみ引っ張ると……
左手には杖の一部だった物が鞘となり
右手には刀になった杖がある

「…さて掃除の時間の始まりだ」

掃除相手？
それはわいてくる者
死者がこの世界にとどまろうとしてアンデットとなりこの世界にとどまる
それが掃除相手だ
何故この山にはアンデットが集まるんだ？
おかげで掃除が面倒だ

……
……
……

はぁ、まだいるのかよ……
やっぱり刀1本じゃ時間がかかるか
もう1本だすか……

左手に魔力を一定以上ためる
そうすると腕に隠していた剣(つるぎ)が出てくるようにしている

作者曰くイメージとしては、スクアー〇、ハンド・ソニッ〇だと思ったらいいだとさ

さて、2本となったからには早く終わらせるか……

……

……

……

これでいなくなったか……

はぁ、まだいたし……

最後の1体を殺りにいくか

「くらえ！！」

視点　エリア

「あ、見つけたよ」

「あの人？はぁ、こんな山の中でなにしているのかってウィン！！勝手に山に入っていかない！！」

はぁ、ウィンてば飼い主を見つけた子犬みたいに駆けつけちゃってうん？この看板何だろう？

『ここ私有地につき入るなクズども』

……クズどもって書いた人そうとう性格歪んでいるわね
って入ったらだめなのじゃ！？
まぁ、ウィンがあの調子じゃ言っても聞かないわよね
少しくらいならいいか

！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？

な、なに山に入った途端なにかしんどくなったというかなんていうか
気のせいなのかな？
ヒータ達は、って元気そう……少し青ざめているのは気のせい
ウィンはって……

「きゃぁぁぁ！！！」

な、なに！？ウィンの前に何か奇妙なものが！？

「ウィン！！早くにg「くらえ！！」！？」

えっ、何！？頭が追いつかない……
えーと、体がしんどくなった次に奇妙なもの……おそらくアンデットの部類がウィンの前にいて
ウィンの探していた人が剣２つ持って現れた……剣！？アンデットに物理技効くの！？
と思いつつ見ているとアンデットがやられた……効くのね……

視点　？

最後の1体を倒すとなんか6人くらいいるのだが……
アンデットではなさそうだな
じゃ、杖と剣を戻すか……

はぁ、この山の結界で生き物は入れないようになっているはずなのだが
何故入ってこられる？
……はぁ、こいつら魔力桁外れに高いな……
だから結界を入ってこれたのか
暇だし話くらいするか……

「き、来たぞ！！殺らなきゃ殺られる！！
火霊術ー火炎地獄」

…赤いのがなんか火の魔術を使ってきたし……
なんだよ『殺らなきゃ殺られる！！』ってまぁアンデットだったら殺していたが
てかそんな場合じゃないな

「…山火事をおこすつもりなのかよ……
水霊術ー大寒波」

火炎地獄で出た火を大寒波でおさえる
間一髪で間に合ったみたいだ

「…はぁ、お前ら何のつもりだ」

「何のつもりってお礼を言いに来たんだよ」

緑のやつが話かけて来た
「…お礼で山火事未遂か」
赤いやつはそっぽ向いている
「ヒータは私たちを守ろうとしたの
だから仕方ない事だったのよ
まぁ、ヒータが先走って攻撃したのだけど」
青いやつが弁解してきた
赤いやつはヒータというのか、ブラックリストに載せておこう
最終的に青いやつヒータを売ったな
「…はぁ、止めたからいいが次したやつは覚悟しておけ」
脅しをかけておけば何とやら
これで大丈夫だろう
まぁ、次されたら殺すしかないか
「…で、そこの緑のやつお礼とはなんだ？
お礼をされるような事をした覚えはないが
てか、お前ら誰だ？俺に何のかかわりがある？」
緑のやつはどこかで見たような気がするが気のせいだろう
だが、他のやつらは知らない
「お礼って覚えてないの？
私のかばんを変な人から取り返してくれたの

あ、それから私、緑のやつじゃない、ウィンだから覚えておいてね
それから、かかわりは「…もういい、俺のミスでこうなったのが分かった」」
はぁ、あの時かばんをわたさずに捨てておけばよかったのか
「で、お前らこれからどうするんだ？」
「どうするって山を出ていくのだけど」
青いやつがとぼけたことをぬかした
「…それは無理だ、ここに結界を張ってあるからな
外から入ってこられるのは魔力が桁外れの者のみ
中から出られるのは俺とここにいるベビーや他のドラゴンのみ
お前らに出られるという選択肢がない」
ベビーが肯定するように『がう』とうなずいた
「「「「「「な、なんだって！！！！！！！！！」」」」」」
「…うるさい」
はぁ、さっきから黙り込んでいたメガネやイチャイチャしていた2人まで一緒に叫ぶなよな
耳が壊れる
「…と、言うわけだ、お前らはここでのたれ死ね
俺は家に帰るから、じゃな」

「「鬼だ、鬼がいる！！」」

何か青のやつとヒータが叫んでいるが
無論無視して帰ろうとした時何かが手を引いた
ウィンが手を引いていたようだ

「私たちも連れて行ってよ」

そういい、涙目で上目づかいでみてきた……
はぁ、そんな顔されたら

「…ウザい、そんな顔するな、蹴り飛ばしたくなる」

「「本物の鬼がいる！！こんなの生かしておいたらダメだ！！」」

「…はぁ、うるさい
分かった、分かった連れて行ってやるから少し黙れ、てかもう話すな
それからウィン、右腕に嬉しそうに笑いながら抱きつくな、重い、
殴りとばすぞ」

「「絶対鬼だこいつ！！！」」

はぁ、ウィンは言ってもはなさないし
青いやつとヒータはうるさいし
黒いやつと白いやつはイチャイチャしているし
メガネは黙っているからよしとしよう

「…今から行くから遅れるなよ
遅れても無視して先に進むからな」

はぁ、これからどうしようか……

第1話（後書き）

この主人公、変人を殺そうとしていましたが、
心臓をさす直前でやめていたので、ウィンがいてもいなくても変人は生きています。まぁ、死んだように気絶していますが……

霊術は魔法カードから採用します。
火炎地獄ならば、見た目が炎っぽいので火霊術、
アームズ・ホールのように見た目がどれに当てはまるかは分からないのは術式～番
とします。
作者が見た感じで決めるので皆さんが水霊術だと思っても作者が地霊術とするかもしれないのでご了承をおねがいします。

アンデット好きの方へ、ゴミと書いてごめんなさい。

主人公が名前出てきてなかった……
次くらいに出てくるかな？

では、感想お待ちしています。

第2話（前書き）

モンスターの各ステータスは全く関係ないものとして話を進めていきます。
この小説【視点】を入れたのはいいけど書きにくい……
3人称でした方が良かったかな？

第2話

視点　エリア

話の流れであの子の家に行く事になったけど、
なんなのよあの子
ウィンの涙目と上目づかいその上、右腕に抱きつかれているのに動じないなんて……
何者なの？もしかして同性愛者なのかしら？
だとしたら、ダルクが危ないわね
あ、ダルクを犠牲にしたら私たちは大丈夫だわ！

「…青いやつ、俺は同性愛者じゃないから安心しろ
同性愛者はお前じゃないのか？ウィンに対してだが
俺がウィンに動じないのはこいつに全く興味ないからだ
それからこいつ、いつの間にか寝ているのだが……」

「あ、あなたなんで心を読めるのよ！！
それから私は同性愛者じゃないわよ！！
それに私エリアだから次からちゃんと呼んでよね！！」

「…んな事どうでもいいからウィンをどうすればいい？
歩きにくいから捨てていきたいのだが」

ヤバい、目が本気だ……

「お前がおぶったらいいじゃねーか」

「…はぁ、ヒータか
俺が何故こいつをおぶらないとならない
こいつにそこまでする必要が無いと思うが？
なんならお前がおぶればいい」

「おぶるくらいいいじゃねーか！！
ウィンがお前の事好きなんだからいいじゃねーかよ！！
何？もしかしてか弱い女の子におぶらせるつもり？」

「…はぁ、なつかれていると言え
それからお前のどこがか弱いんだ」

くすっ、そういいながら結局はおぶっているじゃない

「なあ、なあエリアこいつってもしかしてツンデ「ヒータ、みなまで言ったらダメだわ」だよな」
「「くすくすくすくす」」

「…後でお前ら来い
この世から消してやるから」

や、やばいさっき以上の不機嫌顔になった……
しかも目が怖い……
絶対敵に回したくないわね

「悪かったって！！もう言わないから許せよ！！
お前と俺の仲じゃねーか！！」

あれ？ヒータともう仲良くなったのかしら？

「…ふっ、笑わせる
お前は俺のブラックリストに載っているのだが
そんなやつを許すと思うか？」

「エリア、こいつ殺ろうぜ！！
こんなやつ生かしていたらゼーテーダメだ！！」

「…はぁ、叫ぶなうるさい
まぁ、聞かなかったことにしてやる」

やっぱりツンデ……今睨まれたから性格の事考えるの止めましょう
それよりもなんで心を読めるのよあの子！！
あ、聞く事あったの忘れていた

「ねぇ、さっきアンデットを剣でたおしていたけど
アンデットに物理技効くの？」

「…普通は効かないだろうな
あやつらは肉体が損傷してもすぐ回復するような奴らだ
その回復スピードは、今お前が考えたスピードの倍以上だ
だから切る事はできるかもしれないが、意味がないな」

「じゃ、あなたの持つ剣はどっちも普通じゃないの？」

見た目は普通なのにね

「…見た目だけは普通だ
だが、これらの剣に呪いの類の魔術をかけたから効く
その魔術というのは、魂を直接冥界へと送る
アンデットは基本的にこの世にとどまろうとするために残った魂の

怨念
だから、跡形もなく消える
冥界へ行った魂はどうなったか知らないな
恐らく帝のヴァンダルギオンが働いてくれているだろう
文句を言われたら言い返せばいい
アンデットの事を後回しにしているあいつが悪いのだからな」

「その魔術に効くのってアンデットだけなの」

「…いいや、全ての魂があるものに効くな
お前らを切ってもなるが…そんな身構えなくていい
めんどくさいからな、アンデット以外はこれらの剣は振るわない」

へぇ、変なところで……
そういえば私たちこの子の家に行くのだったわね
この子の家族迷惑なんかじゃないかしら

「話変わるけど、私たちってあなたの家に向かったいるのよね
あなたの家族は迷惑なんかじゃないの？」

「……いや、俺の家族は弟のベビーしかいないからいい
家で泊める事はベビーも同意した事だからな
はぁ、ちゃんとした結界をあの結界の外に張るべきだったな
あの結界の外し方分からないからほっとかなければこんな面倒な事
はならなかったのだが……」

彼曰く弟のベビーが『がう』と肯定するように言った

「ベビーって弟だったの！？
いや、そんな事よりもお父さんやお母さんは？」

「…はぁ、親父やおふくろはとっくの昔に死んでいる
だから、他に誰もいないから反対するやつはいない
こんなどうでもいい話はもういいだろう」

……どうでもいいって

「どうでもいいわけないでしょ！！！！
あなた親をなんだと思っているの！！！！
もういないのかもしれないけど、感謝をしなさいよね！！！！」

この子目を思いっきり見開いている
何かその……意外な事を言われたような感じ？
そんな意外だったかしら？

「…すまなかっただが、お前がなんでそんな事言うんだ？
俺の両親の事はお前には関係ないだろ？」

なんか、真面目な顔でそう謝れたら照れるわね

「べ、別にいいでしょ
ただ単に考え方が間違っているから怒っただけなんだから」

「そりゃ、エリアが怒るに決まっているだろ
エリアもお前みたいに両親がいねーからな
同じ境遇の者としてさっきの発言は勘に触ったのだろうな
俺もそんな境遇だったら怒っていたかもしれねーよ」

「この話はもういいでしょ！！」

「あれれ、エリアもこいつの事言えないのじゃねー？
照れちゃってエリアもかわいいとこあるじゃねーか！！」

な、ヒータ調子に乗って！！

「な、何なのよ全く！！
私がいつもかわいらしくないとでも言いたいの！！」

もう！！ヒータのバカ！！

「あちゃー」

「ヒータ調子に乗りすぎましたね」

視点　？

はぁ、まさかあんなやつに説教されるとは思わなかったな
そういえば、あいつなんで照れていたんだ？
照れる要素全くないと思うが……
まぁいいか、中にはよくわからないところが変なやつもいるからな

「…エリア、行きすぎだ
家はここだ
別に入りたくないのだったらいいが」

「……あなた私をバカにしているの？
ここ何もないじゃない！！」

はぁ、怒るのも無理はないか
ここは回りに木がなくて森で恐らく他に1つあるかないかの何もない場所だからな

「…見た目だけで判断するな
俺だってアンデットがウジャウジャしているところで野宿などしたくない
まぁ、ここは結界を張ってあるからアンデットは入ってこれないがで、家は地下にある
今から開けるから待っておけ」

地面について手をつくそして魔力を流す……開いたな

「…入口がスロープになっているから転ぶなよ
転んでも俺はなにも責任をとらないからな」

はぁ、家についてもウィンは起きないし……

ん？どうなっているかって？
下に簡易に図を書くからそれでイメージしてくれ（※パソコンで見ないと分からないかもな）

地上
←地上へとつながる扉（一定以上の魔力であく）
？？？？？

―スロープ　―リビング―　　　武器庫とスケボー置き場
―地下1階
―　　　―　　―
―地下2階
？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？
　　　　　　　　　　20階
？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？？
―
―地下21階
―　　　　　色々ある
―地下22階
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――

まぁこんな感じだ

「…手前の部屋がリビングだから、そこにいておいてくれ」

そろそろウィンをおこさないとな……

「…散らかっているのを文句を言っても聞かないからな」

「いやいや、全然散らかってねーじゃねーか
アウスの部屋の方ってアウス杖で殴ってくるな！！！
結構いてーんだよ！！」

ウィンは起きないし……このソファに寝かせればいいか

「…はぁ、うるさい
黒いやつ、ウィンとエリアとヒータ以外のやつの名前を教えてくれ」

「そういえば名前教えてなかったか
僕はダルク、横にいる僕の妹と彼女の役割をしているのがライナ、
ヒータを殴っているメガネをかけたハ〇ー・ポッター似の子がアウス
それから僕たちの役職を言おうかな？
霊使いと呼ばれるものに僕たちは入っているんだ
ウィンが風霊使い
エリアが水霊使い
ヒータが火霊使い
アウスが地霊使い
僕、ダルクが闇霊使い
ライナが光霊使い
こんなもんかな？質問あるかい？」

はぁ、こいつもシスコンなのか……

「…質問が２つほどある」

「なんだい？モテ男になる秘訣かい？」

「…そんなものはどうでもいい
１つ目は闇と光はみな兄弟愛に目覚めているのか？だ」

こいつ、どうでもいいって言った時涙目になったのだが、もしかしてこいつの存在を否定したか？
まぁいいか

「いや、僕ら以外にはあまり見かけないね
確か1つ前の先輩の闇霊使いと光霊使いはそうだったとは聞いたけど」

ほう、もしかして手がかりをつかめるか

「…2つ目だが、リツとカオルを知っているか？」

「……う～ん、知らないね、誰だい？」

はぁ、こいつも知らないか
知っているやつ見つけるだけでさえ見つからないとは……

「…知らないのならいい」

「じゃ、次はこっちの番だね！」

こいつからの質問か……
だるいが、こっちも質問したんだ仕方ないな

「君の名前何だい？」

「あ、私も知りたーい！！」

……ウィンいつの間に起きた……
てか、教えてなかったか？てっきり教えていたのだとおもったのだが

「…教えてなかったようだな
俺の名前はルアだ」

「その杖を見ると何かの役職についてそうだね
役職は何？
僕の予想では魔導戦士か魔導騎士かな
魔力が多いにも関わらずに魔術をあまり使わずに剣でアンデットに攻撃していたからね
恐らく魔術は使えないという訳じゃないとおもうけど」

こいつ意外と鋭いな……
こいつらの中で1番賢いんじゃね？
策士に向いてそうだな

「…悪いが魔導戦士でもないし魔導騎士でもない
普通のやつなら迷わずそれを選ぶだろうな」

「ふーん、じゃ何だい？」

「……龍使いだ……
詳しくはそこにいるメガネ……じゃなくアウスに聞け
役職を言った途端に知ってそうな顔になったからな」

そんなおびえた顔をしているあたり知っているって丸わかりだ
さて、今回はどのような感じになっているにかな

「アウス？ルアの役職って何なの？」

「『龍使い』っていうのは……」

第2話（後書き）

中途半端なところですが2話は終わりです。
やっと主人公の名前と役職が出てきましたね。

リツとカオルについて知りたい人は遊戯王GX～神の悪戯～を読めばわかります。

そういえば霊使いで1番人気があるの誰なのかな？

感想お待ちしています。

第3話

視点　ルア

「アウス？ルアの役職って何なの？」

「『龍使い』っていうのは、昔私たち霊使いの一派であったのだけど
何年か前に龍を従わせる方法を魔術師たちが聞いた時、
あろうことかその時の龍使いはウソを教えたらしい
魔術師たちは龍を従わせる事しか頭になくてウソを本当だと信じたらしいです
その方法というのは現実の龍を従わせるのじゃなく死んだ龍を魔力により復活させるという全く違った事だった
魔術師たちはしてみたところ、もちろん龍は従わせる事はできず
復活した龍は肉体を保つ事が出来ず、ゾンビとなった
そのゾンビ……ドラゴン・ゾンビは魔術師たちに傷を付け
ドラゴン・ゾンビが復活した場所である魔法都市エンディミオンをところ構わず破壊しつくした
今でもその傷跡が残っているらしいけど、どこにあるかは教えてもらってないから分からない
そういえば、その時の龍使いがドラゴン・ゾンビを従わせて破壊する場所を決めたとも言われている
龍使いはコレが原因で魔法都市エンディミオンから追放され、この前最後の龍使いが亡くなった事によりその役職が無くなったのだけど……」

「本当なのルア？」

エリアが半信半疑で聞いてきたし……

はぁ、ウィンはアウスが何を言っているのか理解してなさそうだし
ヒータとアウスは身構えているし
ダルクはこの話が間違っている事に気が付いているな
口に手を当て考えているが、詳しくは分からないっぽいな

「…ふっ、前以上に悪者になっているな
ドラゴン・ゾンビはアンデットなのだから龍使いが従わせる事が出来ないだろうに
それに龍使いが龍を従わせる方法を知るはずがない
いくら龍使いでもそれは無理だ
ただ単に心をかよわせているだけなのだが
同じ霊使いなのだから分かるだろ
エンディミオンの傷跡を明かさないところでその魔術師(くず)どもが自身の誤った術のせいでこうなった事が分かるだろ
最後の龍使い？俺がいるのだから最後じゃないだろ
恐らくあいつがが思っているのは俺の両親の事だろうな
あいつらが殺したんだ、だから何も知らず最後の龍使いと勘違いをしたのだろう
おめでたい連中だ
はぁ、自身の失態を隠すために冤罪にさてた龍使いは散々だ」

「ルア？どういう事？」

はぁ、ウィンはやっぱりわかっていなかったか
最後にわかりやすく説明したのにな……

「簡単に言えば、アウスの言ったことは魔術師が身を守るためについた嘘
龍使いがその嘘の被害にあったという訳
これでいいのかな？ルア」

「…あぁ、そうだ」
ダルクが代わりに説明してくれて助かった
あそこまで簡単によくいえるな
俺には無理だ

「……つまり、ルアがいい人でその魔術師が悪者なの？」
……はぁ、ダルクがバカでもわかるように言ったのに完全に理解できてないとは
こいつ頭大丈夫か？

「…もうなんとでも思っておけ
これ以上説明するのだるい……
ダルクにでも聞いておけ」

はぁ、ダルクが困ったような顔をしてウィンに説明しているし
あいつ本当に大丈夫か……

「…はぁ、説明するだけでなんでこんなにも疲れるんだ……
まぁいい、今からそれぞれの部屋を決めるが要望のあるやつは先に言え
後で言っても聞かないからな」

「お、おい！！
説明されて分かったけど、お前それでいいのか？
このまま勘違いをされて世間の冷たい目を浴びながら生きていくんだぞ！！」

…はぁ、やっぱりこいつは……

「…うるさい叫ぶな
どうせ龍使いの事を知っているのは上層部なやつだけだろ
上層部のやつは頭が固い
何を言っても聞かないさ
それにもし噂で下層部のやつにも広がっていたとしても
一度広がった噂はなんとやらというだろ
言うだけ無駄だ」

「で、でも」

「…くどいぞ！！
俺がいいって言っているんだ！！
どうでもいいだろ！！

…はぁ、さっさと部屋の要望を言え
こっちが勝手に決めるぞ」

どうしてヒータ(こんなやつ)に心配されなくてはならないんだ
はぁ、無性に腹が立つ

視点　ヒータ

なんだよあいつ
せっかく人が心配してやってんのに
てか、あいつ感情すぐに変えていたな
怒ったと思ったら急にさっきまでの冷静？陰気？まぁそんな感じで

静かになったし
部屋の要望を決めろって言っていたな
要望ねーのだけど……
「ルア、要望いいかい」
「…なんだ
限度が超えた事をほざいたらこっちが決めるからな」
「ははは、そんな不機嫌にならないで
簡単な事だよ
ただ単にライナと相部屋がいいだけだから」
「（…こいつ本当にあいつに似ているな……）
…そんな事だったら別にいい
他のやつはあるか？」
あ、俺いい事考えた！！
「はいはい！！俺もあるある！！」
「…他にはいないのか
じゃ連いてこい」
「おい！！無視すんなー！！」
「…なんだうるさい……
分かったから黙れ
要望は聞くだけ聞いてやるから」

「聞くだけかよ！！！！

まぁいいか、俺の要望はルアとの相部屋がいいぜ！！」

ふっ、どうだ

これでちょっとは動揺するがいい

「…却「えぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！ヒータってルアとの相部屋がいいの！？じゃ私も！！！！」下……ウィン黙れそして却下だ」

くっ、こいつ眉１つも動かさないとは……

てか、ウィンが動揺するなよな！！！！！

「…ヒータは野宿でぃいな

じゃ、案内するからついて来い」

「止め？？？？？？？？？？？？？？ぃ

野宿だけは止めろ！！いや止めてください！！！この通り（土下座）」

「…はぁ、目障りだ

分かったからとっととどけ、蹴り飛ばすぞ」

こ、こいつ……

だが、結局は許すもんなこいつは

素直じゃないやつだ

視点　ルア

「…ウィンの部屋はここでいいな
はぁ……これで終わりだな
それから良く聞けよ
この突き当りが俺の部屋だから、絶対、に入るなよ
入ったやつは命が千あっても足りると思うな」

「そ、そこまで!?何があるのよ!?」

はぁ、エリアが何か言ってきたが無論無視

部屋は地下１５の空き部屋を使わせた
５人分しか空き部屋がなかったが
ダルクとライナが相部屋でいいからちょうどだ
それに俺の部屋の近くに置いておかないと何をするのか分からないからな

「…俺はリビングに戻るから何か文句があったら言いに来い
聞くだけ聞いてやるから」

……
……
……

うん?誰か来たか……

「…ウィンか？文句は何だ？」

「うんん、文句はないよ、ただ……」

……なんだ？
さっさと答えろよ

「…はぁ、できる範囲なら言う事を聞いてやる
ただなんだ？」

……なんだかウィンの表情が一段と明るくなったのだが
はぁ、こいつ1番やっかいなやつになりそうだ

「私とデュエルして！！」

……はぁ？

「デッキ1つくらいならあるでしょ
いいじゃない、ウィンの相手してあげなさいよ」

エリアいつの間にいたんだ
神出鬼没スキルでも持っているのか？

「…はぁ、あることはあるが何故しなくてはならない
俺とせずにエリアとすればいいだろ」

「私とするの嫌なの？」

……はぁ、どうしてこいつはすぐ涙目になるんだ

「…分かった分かった、してやるから泣くな
絨毯(じゅうたん)が汚れるし、うるさい」

してやるっていったらこいつすぐ泣き止んだぞ
なんなんだこいつ？
嘘泣きの達人か？

「…たしかこのクローゼットの中に……見つかった
はぁ、先攻は貰うぞ」

「「デュエル！！」」

ルア　ＬＰ　４０００
ウィン　ＬＰ　４０００

「…ドロー
Ｄ－ＨＥＲＯディフェンドガイを守備表示で召喚（守備　２７００）
カード４枚伏せターンエンド」

「私のターン！ドロー！！」

「…ディフェンドガイの効果、スタンバイフェイズになったことに
より１枚ドローしろ」

「？ドロー？」

「…便乗を発動
相手がドローフェイズ以外でドローした時に発動できる
その後、お前がドローフェイズ以外でドローすると俺は2枚ドローする

発動後、強欲な贈り物を発動
お前は2枚ドローする」

「ドロー？」

「…俺は便乗の効果で2枚ドロー
手札断殺を発動、互いに2枚捨て2枚ドローする
俺はこの2枚捨てて2枚ドロー」

「えーと、このカードとこのカードを捨てて2枚ドロー」

「…便乗の効果により2枚ドロー
もう1枚の手札断殺を発動
効果はもうわかるな
俺はこの2枚を捨てる、2枚ドロー」

「えーと！？えーと！？この2枚捨てて2枚ドロー！！」

「…便乗の効果により2枚ドロー
ちっ、そろわないか……
さぁ、お前のターンを続行しろ」

「ルアちょっといいかしら……
なんでさっきまで1枚だった手札が7枚になっているのかしら……」

「…便乗の効果でな」
はぁ、見てて分からないのかよ
横で見ているだけだからわかるだろ
さて、この手札をどう処理するか

「ドラゴンフライを守備表示で召喚！！（守備　９００）
カード２枚伏せてターンエンド」

「…ドロー
２体目のディフェンドガイを召喚（守備　２７００）
成金ゴブリンを発動
デッキから１枚ドロー、お前は１０００ポイントライフを回復する
折れ竹光をディフェンドガイに装備、装備モンスターの攻撃力は０
ポイントアップする
黄金色の竹光を発動、『竹光』と名の付いた装備魔法が存在する場
合に発動できる
折れ竹光がある事により発動条件は満たしている
俺は２枚ドローする
もう１枚の黄金色の竹光を発動、２枚ドロー
手札断殺を発動、この２枚捨て２枚ドロー」

「私はこの２枚を捨てて、２枚ドロー」

「…便乗の効果により２枚ドロー
成金ゴブリンを発動、１枚ドローお前は１０００ライフ回復
ちっ、そろわないか……
無限の手札を発動、互いに手札枚数の制限がなくなる
ターンエンド」

「ど、どうしようエリア！？
ルアドローばっかりしているよ！？
手札８枚あるし！？」

「はぁ、ルアはあのカードをそろえているから多分このターンしか
勝てる機会はないわ
このターンでルアのライフを０にしなさい」

「そんな～
あ、でもなんでドローばかりしているのかな？
デッキ切れしたら負けるのに」

こいつ知らないのか？
結構有名なほうだぞ
まぁ、いいか

「…ぐだぐだ話さずさっさと進めろ」

「はーい、ドロー！！」

「…スタンバイフェイズに入ったことによりディフェンドガイの効
果発動
１枚ドローしろ」

「ドロー！！」

「…便乗の効果で２枚ドロー
もう１体のディフェンドガイの効果でもう１枚ドローしろ」

「ドロー！！」

「…便乗の効果で2枚ドロー
ふっ、エリアの言う通りこのターンで僕を倒さなかったらお前の負けだ
せいぜい頑張るんだな」

あと1パーツか
残りデッキ枚数は１１枚か
余裕でいけるな

「うーん、頑張ったらいけるかな？
フィールド魔法発動！！脳開発研究所！！
緊急テレポートを発動！！自分の手札またはデッキからレベル3以下のサイキック族モンスターを1体特殊召喚する！！
デッキからメンタルマスターを特殊召喚！！
念導収集機を発動！！自分の墓地に存在するレベル2以下のサイキック族モンスターを任意の数だけ特殊召喚する！！その後、自分はこの効果で特殊召喚したモンスターのレベルの合計×３００ポイントダメージを受ける」

はぁ、どう見てもあのコンボか
無限ドローするつもりか？

「…手札断殺をうまい事使われたな
どれを特殊召喚するんだ？」

「ガスタの巫女ウィンダを3体とクレボンスを特殊召喚！！レベルの合計分の２４００ダメージを受ける
えーっと、メンタルマスターの効果で８００ポイント払い

自分フィールド上のサイキック族モンスター1体をリリースして発動する！！
ガスタの巫女ウィンダをリリースする
で、８００ポイントは脳開発研究所の効果でサイコカウンターを１つ置く事で肩代わりできるっと！！

効果の続きで自分のデッキからレベル４以下のサイキック族モンスターを１体特殊召喚する！！
デッキから……いた！！ガスタの静寂カームを特殊召喚！！
メンタルマスターの効果をもう１度発動！！
カームをリリースしてデッキからカームを特殊召喚！！
もちろん、脳開発研究所の効果で肩代わり！！
もう１度使ってカームをリリース、カームを特殊召喚！！

カームの効果発動！！自分の墓地のガスタと名の付いたモンスターをデッキに戻して
自分のデッキから１枚ドローする
カーム２体をデッキに戻して１枚ドロー！！よし！！」

「…喜んでいるところ悪いが便乗の効果で２枚ドロー」

……はぁ、そろわないな
やっぱ運ないな

「サイクロン発動！！便乗を破壊っと！！」

もう便乗いらないからまぁいいのだけどな
あいつのプレイの邪魔になるから、あいつからしたら破壊した方がいいけどな

「さてメンタルマスターの効果で「…はぁ、めちゃくちゃ続くのだろ、勝手にやっててくれ終わったらよんでくれ」はーい、カーム出して、カウンター乗せて、カーム出して、カウンター乗せて……」

はぁ、あれで何どうするのか
あそこから色々戦術ができるぞ
まぁ、ここを耐えて次のターンサイクロンを使って脳開発研究所を破壊すればいいのだけどな

「ルア、後何枚でそろうの？」

「…後1枚だ
お前の助言通りにウィンはこのターンでしか俺を倒す機会はない手を抜くつもりもないからな」

「へぇー、それならウィンの応援を頑張っておくわ」

『くすくす』って笑っているの見るとムカつくな

「ルア終わったよ」

「…はぁ、良く頑張ってデッキを0枚にしたな、感心するわ」

モンスターは、ガスタの静寂カーム1体、ガスタの巫女ウィンダ2体、メンタルマスター1体、カバリスト1体か……
クレボンスがいつの間にかカバリストとなっているのだが……

「レベル4ガスタの静寂カームとレベル2ガスタの巫女ウィンダとレベル1カバリストにレベル1のメンタルマスターをチューニング！！

集いし願いが新たに輝く星となる　光さす道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよスターダスト・ドラゴン！！（攻撃　２５００）
念導収集機を発動！！墓地からカバリストとメンタルマスターを特殊召喚！！
レベル１カバリストにレベル１のメンタルマスターをチューニング！！
集いし願いが新たな速度の地平へ誘う　光さす道となれ！シンクロ召喚！希望の力、シンクロチューナーフォーミュラーシンクロン（守備　１５００）
ドロー効果は使わない！！

レベル８スターダスト・ドラゴンにレベル２のフォーミュラーシンクロンをチューニング！！
集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く　光さす道となれ！アクセルシンクロ！！生来せよ！！シューティング・スター・ドラゴン（攻撃　３３００）

無欲な壺を発動！！自分または相手の墓地に存在するカードを２枚選択し、持ち主のデッキにもどす！！
このカードは発動後ゲームから除外する
無欲な壺は１ターンに１度にしか発動できない
私はメンタルマスターとクレボンスをデッキにもどす

さらに貪欲な壺を発動！！
自分の墓地に存在するモンスター５体を選択し、
デッキに加えてシャッフルする
その後、自分のデッキからカードを２枚ドローする
墓地からガスタ・イグル、ガスタ・ガルド、ガスタ・スクイレル、クレボンス２体をデッキに戻し２枚ドロー！！

シューティング・スター・ドラゴンの効果発動！！
自分のデッキの上からカードを5枚めくり、その中のチューナーの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる！！その後戻したカードをデッキに戻してシャッフルするよ
今デッキはちょうど5枚、その中には全てチューナー！！
一応めくるよ1枚目、ガスタ・イグル、2枚目、ガスタ・ガルド、3枚目、クレボンス、4枚目、クレボンス、5枚目、クレボンスほら全てチューナーだよ
シューティング・スターは計5回攻撃ができる！！」

はぁ、よくやる
これが決まったら俺の負けだな
そんなことより、なんでクレボンスがこんなに出てくる？
クレボンスが好きなのか？

「1度目の攻撃！ディフェンドガイに攻撃！！
2度目の攻撃！ディフェンドガイに攻撃！！
3、4、5度目の攻撃はルアにダイレクトアタック！！
スターダスト・ミラージュ！！」

「…そんなの通すわけないだろ
3回目の攻撃、言い換えると1回目の直接攻撃の時
手札にあるバトルフェーダーの効果を発動
相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる
このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する
この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外されるが」

「くっ、ウィン惜しかったわね……」

「ターンエンド」

「…ドロー
はぁ、まだそろわないし
王立魔法図書館を召喚（守備　２０００）
折れ竹光を王立魔法図書館に装備
黄金色の竹光を発動、２枚ドロー
揃った、エクゾディア
効果により特殊勝利だ」

「ぐすっ、負けちゃった、エリアぁ！！！」

「くっ、涙目で抱き着いてこない！
落ち着け私、落ち着け、はぁー」

はぁ、こいつら大丈夫か？
シューティング・スターか……
手札にバトルフェーダーがいなかったら負けていたな

「おっ、デュエルしていたのかい」

「…ダルクだけか、ライナはどうした
お前らの事だから、いつも磁石のように引っ付いているのじゃないのか？」

「流石にそこまでは引っ付かないよ……
で、どっちが勝ったの？って聞くまでもないか
エクゾディアが揃っているもんね
エクゾディアか……」

「…作ったのは俺じゃないけどな
知り合いが置いて行ったデッキだ
特殊勝利やバーンが好きなやつだったからな
俺のデッキはあるが使う気ならない限り使わないからな」

「へっ？」

何驚いているんだこいつ？
変な声だして気持ち悪いな
はぁ、デッキ元の場所になおすか

「ルア、知り合いが置いて行ったって、この山から出て行ったの？
じゃ、僕たちも出られるんじゃ」

「…はぁ、知り合いがこれを置いて行ったのはここに住む前の家だからな
ここには来てない
この結界は親父が死ぬ前にかけたから俺には外し方がわからない
だからお前らが出られるなんて無理だ
まぁ、いつかここから脱出させてやるから安心しろ
俺も家にベビー以外のやつがいられると落ち着かない
結界を外したらさっさと出て行けよ」

はぁ、疲れる
それから、こいつ何笑っているんだ？
ウィンとエリアはまだやっているし
さっさと結界の外し方を見つけるか

第3話（後書き）

デュエルを入れるとやっぱり多くなりますね
このデッキを作ったのはもちろんリツです
リツとルアの関係はいつか番外編などに書くつもりです
ディフェンドガイと便乗でエクゾディアそろえる人、僕以外にいるかな？

感想お待ちしています

第４話（前書き）

この小説どこに向かっているのだろうか？
自分でも分からない……
それにアウスの口調がいまいちつかめない
公式のを使うとなんだか負けた気がするし

第4話

視点　ルア

「…今から調べものをしてくる
用があるやつは地下8階の図書室にいるからそこに来い
部屋の文句を言いにここに来たやつにも言っておけ
言い忘れていたが、そこにエレベーターがあるからそれを使えばいい
ベビー行くぞ」

なんだか後ろから『あるなら言ってよ！！』などと聞こえたが空耳だろう
はぁ、さっさと探すか……

……
……
……

はぁ、最近使ってなかったから汚れていると思ったら、思ったほど汚れてないな
だが、埃が目立つ
探し物する前に掃除するか
確か、部屋の隅に掃除道具があったはず
……あった、はぁ、やるか

……
……
……

「ルア！お風呂ってどこ？入りたいのだけど」

「何人くらい一緒に入れるかしら？」

ウィンとエリアか……
こいつらいつの間に来た？
やはり、神出鬼没能力あるのじゃないのか？
普通だったら誰か来たのならすぐわかるはずなのにな

「…風呂は地下２０階にある
大勢入れるから他にも誰か呼んで一緒に入っとけ、手間が省ける」

「どんだけ大きいのよ！！！！」

はぁ、叫ぶな
埃がまう
そろそろ掃除機をかけるか
ホウキがけはこんなものでいいだろう

……

……
……

ん？誰だ？
気配を拾えたってことはエリアではないな

「やあ、掃除頑張っているね
手伝おうか？」

「…はぁ、ダルクか
別に手伝わなくていい
なにか用か？それよりあいつらと一緒に風呂に入らなくていいのか
？」

「いくらなんでも女子と一緒に風呂に入るのはダメだよ
用はない事はないんだよね」

はぁ、何を聞きたいんだこいつは
『ない事はない』ってややこしく言わずに
『ある』って簡単に言えよ

「…なんだ、あるなら早く言え
ないのならさっさと出ていけ」

「まぁまぁ、そんなに怒らず」

別に怒ってはないが

「ちょっとだけ気になったことなんだけど
ヒータの火霊術を止める時に水霊術を使っていたよね
ルアは水に属するのかなって」

属する？あぁ、何の術を使うかか……
そこのところよく分からないのだよな
風に属したら、風霊術
水に属したら、水霊術
火に属したら、火霊術
地に属したら、地霊術
闇に属したら、闇霊術
光に属したら、光霊術
を使えるのだったか？

「…さーな、自分でもどこに属しているか知らない
あえて言うなら『無』とでも言っておくか
聞きたいのはこれだけか？」

「『無』…かい？」

「…あぁ、『無』だ
字のごとく何も無い
どこかに属する波動がないからな
風の波動が体内にあれば、必然的に風に属するだろ
だが、俺には何も無いからな
『属するのはどこだ』と聞かれても答えられないという訳だ
記憶したか？」

「だったら矛盾が起きるよね
属するのがなければ、その霊術が使えないはずだけど

そこのところはどう説明するのかな？」

はぁ、やっぱりこいつは鋭いな
普通のやつだったら気づかないのにな
気づいているやつももしかしたらいたかもしれないが
あまり追究しなかったのかもしれないな

「…はぁ、俺の体の中にはあらゆる波動が入り乱れているとでも言ったらわかるか
風、水、火、地、闇、光が同量でこの６種類の波動が混ざることで打ち消し合うことによって『無』になる
幸いなことに俺の体内には全ての波動が同量だ
だったら、そのうちの１つ以外弱くすれば……例えば風以外を弱くする
そうすると、風だけが残る
これにより、その時だけ風に属する
この原理であの時水霊術を使った
これで理解したか？」

そろそろ掃除を終わりにするか
きれいになったしな
まだ、ダルク（埃）は残っているが、ほっとけばどこかに行く埃だ

「そんな事可能なのか
体内に６つの波動があるなんて
たしか１つにしないとダメなのじゃ……はっ、なるほど、そうか！！」

ん？考えたようだが、理解したようだな

「…恐らくお前が思ったことであっているはずだ
元々生まれた時には例外はあるが、ほぼ全員が６つの波動を宿して生まれる
それから、何歳かしてからその中から１つだけを選びそれに属する
それが普通だが、その時の俺はそれじゃ面白くなかったのだろう
だから６つの中から６つ共選び、それを全てみがいた
子供の頃ってすごいよな、
自分で決めた事を自分が好きな事に変えてしまうように脳が変えてしまうからな
好きな事ばかりして気づいたら今だ
だから属するのはないが、だが全ての波動はＡ級だ」

確か、Ｆ＞Ｅ＞Ｄ＞Ｃ＞Ｂ＞Ａと波動の価値を決められるのだったよな
Ｆだったら、術すら使えなくて
Ｃでようやく簡単な術を使えるようになるのだったか

「全てＡ級って……
だけど、良くやるね
そんな多種の波動を身に着けた魔術師ってルアくらいじゃないのか
他には聞かないしね」

「…俺の知っている限りではもう１人いる
風と闇だったか？忘れたが、たしかそれであっているはずだ
お前なら聞いた事はあるはずだが
『疾風の闇』『漆黒の風』どちらかで呼ばれていたはずだ」

「噂くらいしか知らないけど、確か歴代で最強の闇霊使いだったかな？
闇と風をうまく使えたとかなんとか

今聞いたからわかるけど、２つの波動を持っていたからそう呼ばれていたのか
でも、継承の儀式の途中で消えたから闇霊使いとしてなりったたないから最強じゃない、とも言われているけど」

「…そいつの親父が目立ちたがりでな
継承の儀式を盛大なパーティーのようにしたのだとさ
それが仇となって、儀式と途中で消えた事を大勢の人に見られた
だが、そいつはその時の最大権力者で、その場にいた人全員に賄賂をわたし
大声で『儀式の途中で消えたように見えたが、儀式が終わったのと同時に消えたのだ！！だから、儀式は成り立った！！』などとほざいたそうだ
周りは迷惑を被られてしまったな
まぁ、消えてしまったやつからしたら、そう言われてよかったのかもしれない
いつか帰ってきても戻る場所があるからな」

ん？なんだこいつ意外そうな目で見やがって
何か変な事でも言ったか？
だるいし、ゴミを捨てるのと一緒にこいつも捨てるとするか

「へぇ、その子の話する時は不機嫌顔ではなくなるんだ」

「不機嫌顔だったのに表情豊かになって話していたもんね」

「なんだなんだ、そいつってもしかしてお前の彼女だったのか？」

はぁ、だからこいつはなんで神出鬼没なんだ

「…不機嫌顔で悪いかよ
それにそいつ男だ、彼女っていう案は消えるな
それにエリアと違って、同性愛には全く興味ない」

「私も同性愛には興味ないわよ！！！！
みんなも私を避けないでよ！！！！」

「エリア、ゴメン
お前の趣味は否定はしないが、俺は興味ねーんだ
だから……な」

はぁ、どうしてウィンは俺を見るなり腕に抱きついてくるんだ？
『放せ』という意味をこめて頭を撫ぜたら逆効果で喜んでいるし……
はぁ、やっぱりこいつが一番厄介だ

「るーあー、弁解しなさいよね！！！！
そんなウィンとイチャイチャしてないで！！！！
あなたのせいで私の立場がめちゃくちゃになっちゃったじゃないの
！！！！」

「…うるさい叫ぶな
恋愛対象のウィンがとられたように見えたからって八つ当たりするな
それからイチャイチャなんてしてないからな
こいつが一方的に抱き着いてくるだけだ」

はぁ、こいつ寝ているし
このパターン2回目なのだが……

「な、なに言っているのよ！！！！
なんで私の恋愛対象がウィンなのよ！！！！

私は女子が恋愛対象じゃないのよ！！！！」

はぁ、泣きかけだし
これ以上いじくるのは止めるか

「…泣くな、床が汚れるしうるさい
俺の勘違いでいいのだな、はぁ……」

アウスがあやしているし、あいつ　いたのか気づかなかったな、ライナもいるし
ヒータが謝っているし
はぁ、うるさいな

「…ここで叫ぶなら出ていけ
ついでにこいつも連れていけ、邪魔だ
さっき部屋を教えたからわかるだろ
風呂あがったのかだったらダルク入ったらいいだろ」

「そう、じゃ入ろうかな
ルアも一緒にどう？」

何言っているんだこいつ？
俺が一緒に入るって？

「…却下だ
俺は1人で入る派だ
分かったらさっさと行ってくれ
上がったら教えてくれ、ここで調べものをしているから」

「そう、じゃ1人で入って来るね

後で呼びに来るから」
はぁ、あいつら全員いなくなったな
じゃ、とっとと調べものをするか

……
……
……

はぁ、手がかりはないか……
親父の書斎ならあるかもな
親父がかけたから外し方くらいは残しているだろうな

「ルア、あがったよ
1つ聞いていいかな？」

はぁ、風呂から上がってすぐ質問かよ
風呂に何かあったのか？

「ここって旅館でも、ホテルでもないよね……
どうしてこう設備が整っているのかな」

ん？顔が引きつっているぞ
旅館やホテル行った事ないから分からないぞ

「…整っているのか？

必要最低限なものしか置いてないが」

「必要最低限でなんで温泉くらい大きいんだ！！湯船が！！
1人で入っていてなんだか悲しかったのだけど！！」

あ、その事か

「…親父曰く、『家を建てるために掘っていたら温泉がわき出たから
どうせなら、大きい湯船にしよう！！』だとさ」

「いやいや、限度が……はぁ、今さら言っても無駄か……
僕リビングに戻っているから」

じゃ、俺も風呂入りに行くか
その後、書斎で探せばいいな

……

……

……

はぁ、風呂からあがって部屋に戻って来たら、なんでウィン(こいつ)が僕の
ベッドで寝ているんだ？
部屋ちゃんと教えたはずなのだが
部屋の中見られてない事を願うか
はぁ、こいつ起きなさそうだし……
こいつの部屋に戻しに行くか

いつもと違う家だ
勝手が違うから仕方ないか

……
……
……

はぁ、すれ違うやつがいなくて良かった
ヒータとかに見られたら絶対おちょくられたな
そういえばあいつら晩飯食ったのか？
リビングにいなかったら、ほっておくか

……
……
……

はぁ、見事にウィン以外の全員いるし……

「…はぁ、何か食いたいものあるか
要望がなかったら勝手に作るが」

誰も何も言わない
むしろ意外なものを見る目で見られたのだが
こいつらに意外な目で見られる事多くないか、俺？

「…無いんだな、じゃ勝手に作るぞ」

「る、ルア……
ルアって料理できるの？」

「…できなかったら一人で生きていけないだろ
生きていけない事はないが
できないよりもできた方がいいからな
要望があるのか、だったらまだ聞いてやるから早く言え」

「じゃ、お任せで任せようかな
ルアがどんな料理が得意か気になるしね」

はぁ、お任せって一番対応に困る返答なのだが

「…はぁ、まずくても文句言うなよ」

確か、ハンバーグを作っておいたのがあったはず
焼くだけで、すむように事前に作ってあったんだよな
7人分でいいか……そういえば、あいつらの使い魔見かけないな

「…お前らの使い魔の分は用意した方がいいか？」

「それがね、私たち全員の使い魔、家に置いてきちゃった
だから今いないからいいよ」

はぁ、家に置いてくるバカがこんなにいるなんてな
まぁ、８人分しかなかったからちょうど良かったのだが

「ベビー、あいつらを席に案内してあげてくれ」

ベビーが『がう』ってうなずいてくれた
さぁ、やるか

……
……
……

「ベビー、これも持って行ってくれ」

ベビーに手伝って貰って、皿運び等をしてくれたから時間がだいぶ省略されたな
俺の分も焼くか

「ルア！ウィンが来たからウィンの分もよろしく！！」

「…はぁ、今更来たのかよ
分かったから席につかしておけ」

まぁ、後１つ焼くのと２つ焼くのはもう同じもんだな
とっとと焼くか……

……
……
……

「ベビー、この2つもよろしくな」

はぁ、これで終わりか
ハンバーグと一緒にサラダとライスも追加してやったんだ
はぁ、疲れたな
いつも2人分が8人分になったからな
まぁ、いいか

「…なんだ、まだ食べてなかったのか
さっさと食べろよ覚めるぞ
まぁ、お前らがさめたのを食べたいのならほっておくが」

「なんだよ、せっかくまってやったのに
まぁ、いいか俺もう食べるぜ」

「ねぇルア、あなたベビーと話している時なんだかキャラが違うくない？
私たちと話している時は不機嫌顔なのに
ベビーと話している時はイキイキしているじゃない」

「…気のせいだろ」

本当に気のせいだろ
いつも通りに話しているだけなのだが
こいつらと話すのも同じなのだが
はぁ、食ったら書斎に行くか
その前にまた風呂に入らないと
焼いたから匂いがついてそうだ
はぁ、2度手間になったな

……
……
……

はぁ、やっと書斎にこれた
飯を用意してなかったらこんなにも時間食わなかったのにな
まぁいいか
隅々から探しまくるとするか

……
……
……

無いな……

後はこの本棚だけか
はぁ、1番めんどくさそうだから探したくなかったのだが……
仕方ない、探すか

……
……
……

ちっ、見つからないな
残る段は1番下の段だけか……
ん？なんだこの手紙？
『ルアへ……』
遺書か？後で部屋で読むか
早く探さないと

……
……
……

はぁ、結局ないのかよ
気が滅入る……
部屋に戻ってきたがウィンがまた寝ているか？と思ったがそんな事

はなかったな
流石に2回は間違えないな
さて、遺書らしきものを読むとするか

『ルアへ……
お前がこれを見ている時には俺はもういないだろう』

はぁ、親父らしく最初はベタな展開だな

『まぁ、もしかしたら生きているかもしれんが
いや、生きていたいなぁ』

はぁ、予想通り茶化してきた

『まぁ、冗談はさておき
恐らく俺の事だ結界を張って死ぬだろうな』

……手がかりか？

『結界がある限り、その中はお前の身の安全は守られたと思っていい
追っ手の魔術師もその中には入れないはずだ』

そんな事はもうわかっている
さっさと外し方を教えろ

『俺からお願いがある
それは――――――――――――――――――』

！？なんだと正気か！？
そんな事何故俺に頼む！？

第４話（後書き）

なんだかどうでもいい事を書いてしまったところが多くて長くなりました
まぁ、最後は次回の伏線のような感じで

『疾風の闇』『漆黒の風』はまぁ分かると思いますがリツの事です
早く番外編書きたいな
書くとすればこの伏線が一通り終了してからです
その前に番外編を書くとちょっとしたネタバレが含まれるのでやめておきます

感想お待ちしています。

第5話（前書き）

はぁ、前回までの話を第1話で終わらせようとしていたのに、なぜか4話も使ってしまった……

はぁ、グダグダ書いているからだ……

だったら、グダグダ文章をマスターしてやる！

第5話

『それから、もう1つのお願いだ』

はぁ、手紙の続きまだあるのかよ
さっき書いてあった事より難しかったらお手上げだぞ

『この山に強い力の持ったアンデッドが現れるらしい
その日は、俺が死んだ10年後のお前の誕生日の日だ
どうか、頑張ってくれ

父より』

はぁ、どうして親父はこんな面倒な願いを残したまま死ぬんだ
強い力の持ったアンデッド？果たしてどんなやつか……
そいつが現れるのは後……1週間だと！？
今、あいつらがここにいるのだぞ！？
ちっ、どうするか……
とりあえず、先の願いの方をすれば楽になるか？
くっ、それを終えて1週間で戻るなんて不可能に近いぞ
親父め、俺がこれを見てなかったらどうするつもりだったんだ
どう考えても1週間じゃ……いや、いけるか？
地図もついでに持ってきておいて良かった
親父の部屋にあって、興味があったからな
どこから回ったらいいか……順番に回るしかないな

だが、俺が明日……もう今日か、日付が変わっている
出ていくとあいつらどうなる？
地図があるから行き当たりばったりじゃないとは言え、始めていく
ところだ

1週間で間に合わなかったら、そのアンデッドの餌食となるのか……
くっ、そいつの力の量さえ分かれば計画がすぐ立てられるというのにな
親父がああ言っているから強いのだろう
やはり先の願いを済ませた方がいいか？
はぁ、振り出しに戻る……
起きて決めるとするか……
もう寝よう

……
……
……

はぁ、目覚めが悪いな
こんな問題を抱えているんだ、当然といえば当然か……
てか、この刀で切れば……無理だったらどうする
武器を封じられ、術も封じられたら手は無いな
やはり、先の願いを先にするか……
はぁ、もうそうしよう
これで決めなければまた振り出しに戻る

上が騒がしいな
俺もリビングに行くか……
ベビーも起きたようだしな

「ベビー、行くぞ」

……
……
……

「…朝からうるさい
静かにできないのかお前らは」

とりあえず抱き着こうしたウィンをかわし、コーヒーを淹れ椅子に座る
はぁ、何故まだ抱き着こうとするこいつを手で押さえながらコーヒー入れなければならない
朝から疲れる
はぁ、そういえば話を切り出さないとな

「…はぁ、俺はこれから1週間くらい出かける」

全員の動きが急に止まった
こいつら息ぴったりだな

「る、ルアなんで？」

そりゃ、そう聞かれるよな

「…ちょっとした用ができたからな
まぁ、1週間以内には必ず戻るから」

そうじゃなかったらここが危険だ

「私たちどうすればいいのよ！！」

「…ここを自由に使っていい
アンデットは家の周辺の結界で入ってこれない
それに親父の結界で山の外にも出られないな
家から外に出ない限り安全だ
食糧もまだある
1週間は持つはずだ」

「どうしても出て行かないとダメなのかい？」

「…あぁ、その用は重大な用だからな
今行かないとダメだからな」

今行かないともしかしたら1週間後手遅れになっているかもしれないからな
はぁ、面倒事が続く

「じゃ、僕とデュエルして勝ったらいいよ
もちろん負けたらここに残る事だ
デッキは君のデッキじゃないとダメだからね」

……こいつもデュエル脳か
はぁ、受けないとうるさそうだから受けるしかないか

「…はぁ、仕方ない受けてやろう
だが、俺が勝ったら何も文句言わず引き下がれよ」

はぁ、久しいなこのデッキ使うの
「じゃ、先攻と後攻どうする？」
「…お前の自由でいい」
「じゃ、先攻を貰うね」

「「デュエル！！」」
ダルク　ＬＰ　８０００
ルア　ＬＰ　８０００

「僕のターン、ドロー！
モンスターセット
カード１枚伏せてターンエンド！！」
はぁ、どうせ面倒なモンスターなんだろうな
マシュマロンか？リクルートモンスターか？
「…ドロー
高等儀式術を発動
手札の儀式モンスター１体を選択する
白竜の聖騎士を選択する

そのカードの同レベル、この場合だとレベル４となるように自分の
デッキから通常モンスターを墓地へ送る
デッキからサファイアドラゴンを墓地へ送る
その後、白竜の聖騎士を特殊召喚（攻撃　１９００）

儀式の準備を発動、自分のデッキからレベル７以下の儀式モンスター
を１体手札に加える
その後、自分の墓地から儀式魔法を１枚手札に加える事ができる
デッキからは白竜の聖騎士を墓地から高等儀式術を加える

そして高等儀式術を発動、選択するモンスターは白竜の聖騎士
デッキから墓地に送るのはサファイアドラゴン
これで、白竜の聖騎士が降臨（攻撃　１９００）

儀式の準備を発動、さっきの同じカードを手札に加える

高等儀式術を発動、選択するのは白竜の聖騎士、
デッキから墓地に送るのはサファイアドラゴン
これで、白竜の聖騎士が降臨（攻撃　１９００）」

手札２枚か……
どうするか

「へぇ、白竜の聖騎士が３体か
青眼の白龍を呼ぶのかな？」

これでミラーフォースとか破壊系カードを使われたら最悪だな
あいつの余裕そうな顔がムカつくのだが

「…まだ通常召喚していないからミラージュ・ドラゴンを召喚（攻

撃　１６００）」

ふーん、あいつの顔少し歪んだな
ミラーフォースでもあったのか
まぁ、ミラージュ・ドラゴンの効果でバトルフェイズ中は罠が使えない事を知っていたのだろう
だからかもな

「流石にヤバいかもね……」

予想通りか
それじゃ、ミラージュがいなかったらヤバかったな

「…白竜の聖騎士で裏守備モンスターに攻撃
白竜の聖騎士の効果で、裏守備モンスターに攻撃した場合、ダメージ計算を行わずに破壊する」

破壊したのはキラートマトか
はぁ、厄介なカードかよ

「…戦闘破壊じゃないからリクルート効果は使えない
白竜の聖騎士2体とミラージュ・ドラゴンでダイレクト」

後２６００ライフか

「…白竜の聖騎士の効果発動
このカードをリリースしてデッキまたは手札から青眼の白龍を特殊召喚する
このターン青眼の白龍は攻撃できないが
２体をリリースして青眼の白龍を特殊召喚（攻撃　３０００）

凡骨の意地を発動
ターンエンド」

「へー、ルアなんでもう1体もリリースしなかったの？
もう1体出せばダルクが危ないじゃん」

はぁ、やっぱりウィンか
こんな質問するのウィンくらいだからな

「…考えたら分かるだろ
もしあいつがまたキラートマトなどのリクルートモンスターや面倒なモンスターを裏守備に出された時のためだ
だが、3体もおいていれば攻撃力の高いのを召喚されたら負けるかもしれんから2体はリリースする
だから1体だけおいておく、分かったか？」

はぁ、どうしてこんな説明をしなくてはならないんだ
俺がこれを書いている作者（バカ）とは違いノリで3体リリースなんてするわけないだろ
まぁ、1体だけの方が良かったかもしれないが、まぁ、2体で良かっただろう

「このままじゃ危ないね、ドロー！
相手フィールド上にモンスターがいないことで、バイス・ドラゴンを特殊召喚！！（守備　１２００）
この方法で特殊召喚した場合攻守が半分になっちゃうから守備力が１２００だよ

手札からライトニング・ボルテックスを発動！
手札を1枚捨てて発動！相手フィールド上に表側表示で存在するモ

ンスターを全破壊する！」

ちっ、だがこのターンでは決まらないだろうな
次のターンで何とかなるだろう

「ダーク・リゾネーターを召喚！（攻撃　１３００）
レベル５バイス・ドラゴンにレベル３ダーク・リゾネーターをチューニング！！
王者の鼓動、今ここに列をなす　天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！（攻撃　３０００）」

何とかなるか

「まだだよ、スカーレッド・カーペットを発動！！
フィールド上にドラゴン族のシンクロモンスターが表側表示で存在する場合、
自分の墓地に存在する『リゾネーター』と名のついたモンスターを２体まで選択して発動する
選択したモンスターを墓地から特殊召喚する！

墓地からダーク・リゾネーター（攻撃　１３００）とバリア・リゾネーター（守備　８００）を特殊召喚！！」

バリア・リゾネーター？……はぁ、ライトニング・ボルテックスの時か

「レベル８レッド・デーモンズ・ドラゴンにレベル３ダーク・リゾネーターとレベル１バリア・リゾネーターをダブルチューニング！！
王者と悪魔、今ここに交わる　荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげ

よ　シンクロ召喚！いでよ、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！（攻撃　３５００）

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの効果で墓地にいるチューナの数×５００ポイントアップする！！
よって攻撃力は４５００！！

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンで攻撃！！バーニング・ソウル！！」

くっ、後残りライフ３５００か……

「ターンエンドだよ
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは魔法・罠・効果モンスターの効果では破壊されないからね
どうやって対抗する？」

「…ドロー、凡骨の意地の効果でドローフェイズにドローしたカードが通常モンスターだった場合、
そのカードを相手に見せる事で、自分はカードをもう1枚ドローする事ができる
青眼の白龍を見せドロー、暗黒の竜王を見せドロー、ベビードラゴンを見せドロー、
暗黒の竜王を見せドロー、神竜ラグナロクを見せドロー、デビル・ドラゴンを見せドロー、
神竜ラグナロクを見せドロー、砦を守る翼竜を見せドロー、洞窟に潜む竜を見せドロー、
砦を守る翼竜を見せドロー、暗黒の竜王を見せドロー、デビル・ドラゴンを見せドロー、ちっ終わりだ

竜の尖兵を召喚（攻撃　１７００）」

「そのモンスターを出してどうするの？
僕には攻撃力４５００のスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンがいるのだよ」

「…竜の尖兵の効果発動
手札のドラゴン族モンスターを１体墓地へ送る事で、こいつは攻撃力３００ポイントアップする
墓地へ１１体のドラゴンを送り攻撃力５０００
カードを１枚セットしてターンエンド」

「あれ攻撃しないのかな？
僕のスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの方が攻撃力しただよ」

「…そいつは自身を除外することで攻撃を無効とする効果がある
そしてエンドフェイズ時に特殊召喚する
そんなやつに攻撃するか
セットしているカードがミラーフォースなどのカードかもしれないんだ」

こいつ動揺したな
そのカードの確率か高いな

「ふーん、そうかい
じゃ、僕のターンだね、ドロー！！
うーん、ターンエンド」

「…ドロー、このデュエル勝ったな」

「勝利宣言すると死亡フラグだよ」

「…そんな事どうでもいい
罠発動、強制脱出装置を発動
フィールド上のモンスター1体を持ち主の手札に戻す
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを選択
そいつの効果はバウンスには対応していないからな
竜の尖兵で攻撃」

「罠発動！！聖なるバリアーミラーフォースー！！
効果は分かっていると思うけど、
相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる！相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全破壊する！
竜の尖兵は破壊だよ」

「…はぁ、勝ったな
竜の尖兵は自分フィールド上で存在している時に相手のカード効果で破壊された時、
自分または相手の墓地のドラゴン族通常モンスター1体を特殊召喚することができる
墓地から青眼の白龍を特殊召喚（攻撃　３０００）
青眼の白龍で攻撃」

「いっけー！！！！滅びのバーストストリーム！！！！」

……なんでこいつが青眼の白龍の技名をいっているんだ
こいつのモンスターみたいになっているし……
はぁ、まぁいいか、言うのは面倒だ

「…これで文句ないな
俺は出ていくからな」

時間を食ったが、まぁいい
反論されると思っていたから、その分の時間は予想範囲だ
まさかデュエルするとは思わなかったが
はぁ、だるい、行くか

「ルア、行くのはいいけど、どこに行くのよ？」

「私も行く！！」

「…はぁ、とりあえずウィンはだまれ
親父の結界があるから外に出られないだろ、それに今から行くところは危険だからな
お前じゃ足手まといだ

…次はエリアの質問の答えだが、今から行くところは旧国だ」

「きゅ、旧国ってあそこの！？
何しに行くのよ！！死ぬつもり！？」

どうして死ぬことになるんだ？
はぁ、ウィンは知らなさそうだ

「…はぁ、旧国ってあそこしかないだろ
ウィンが知らなさそうだから、一応説明しておく
昔、ここに移り住む前の国だ
風、水、火、地、闇、光の国に分かれている
確か、俺らの先祖は移り住む集団と残る集団に分かれた

旧国の周りには何百年に1日だけまわりの竜巻などがやむ時があり
外に出られる
ちょうど移り住む時がその時だった、はぁ、自分から説明すると言
ったがだるいな、まぁ続きを言うが
残った集団はそれぞれの国で自由に住んでいるのだったか？
戦闘民族は戦闘をし、古代龍の封印を守っている民族はそれを守っ
たりなどしているのじゃないか？
詳しい事は知らないが
知っているといえば、並みの人じゃ旧国に行けない……着けないと
言う事だけか
竜巻などが常にあるんだそりゃ、無理だろうな

理解したかウィン？
してなかったらダルクにでも教えてもらえ
バカ(ウィン)でもわかるように教えてくれるだろ」

はぁ、真っ先に聞きに言ったし……

「…説明したんだもう行っていいだろ」

「まだ説明は終わってないわ
何しに行くのっていうのがまだだわ」

はぁ、それ説明することほとんどないのだが

「…ただ親父から頼まれた用をしに行くだけだが」

「ふーん、そうじゃ行ってらっしゃい」

「お、おいっ、止めなくていいのか？」

またあいつか、どれだけ俺の邪魔をすれば気が済むんだ

「デュエルの賭けで無理でしょ
それに止めても無視していくでしょうから意味ないんじゃない」

まぁ、あいつの言う通りというのはムカつくが、
まぁ俺の事だ、無視して行くだろうな
はぁ、だるい、もう行くか

「…じゃな、また1週間後」

……
……
……

はぁ、旧国までは時間がかかる
ベビーに乗っていくか

「ベビー、憑依装着」

「がう！！」

憑依装着には、2通りある
1つは使い魔の魔力を自身に憑依させ、能力を上げる事
もう1つは、自身の魔力を使い魔に憑依させ、使い魔を成長させる事

この場合は後者の方だ
ベビーは今、千年竜よりも若々しい姿だ
青眼の白龍くらい大きさだろうな……って俺は誰に言っているんだか
ウィンの天然が感染したか

はぁ、用意はできたからさっさと行くか

……
……
……

はぁ、旧国の前についたが竜巻が吹いているな
どうするか？

第5話（後書き）

旧国にはいろいろな民族がいますが、どの民族が出てくるかは決めていません

まぁ、２つの民族は決めていますが

感想おまちしています。

第6話

視点　ルア

ベビーを元の大きさに戻したが
とりあえず霊術を使って穴をあけてみるか

「…風霊術ーサイクロン」

くっ、かき消されたか
だったら

「…風霊術ーハリケーン」

効果ありか？
なら余り使いたくないが

「…風霊術ー大嵐」

ちっ、穴が空きかけたが新たな風の層が作られたか……
どうするか……
スタート地点を走り出せないと意味がないのにな……

何か打ち消せれるもの……
いや、あれを吸収すれば……いや、そんな術は知らない
6つも術を使えるというのに対抗策が無いのかよ……
……ふっ、1つだけ試してみるか
アレの性質上いけるかもな

「ベビー、コートの中に隠れていて
…さて、してみるか」

初めての試みだからな
失敗するかもな、まぁ、無理やりでも成功さすが

「『無』発動！！」

ふーん、体のまわりに薄い膜のようなものができたな
無色透明だからちゃんと見ないと分かりにくいな
これに術名つけるべきか？『無』というのも一々面倒だがまぁいいか

「…はぁ、通り抜けれるか？」

風が強いな、並みのやつじゃ近づくのでさえ苦しいのじゃないのか？
まぁ、俺はベビー　（憑依装着状態）によく乗るからこのくらいは
馴れたが
竜巻の目の前に来たな一歩踏み込めば竜巻の中に入れそうだな
くっ、『無』のコントロール難しいな
１つでも波動の量が変わればこの状態を維持できないぞ
はぁ、もたもたしても仕方ない、行くか……

「…何とか行けるか？」

『無』が竜巻の『風』の波動を『無』の膜の上をコーディングして
いるな
自分の波動とできないのが幸いだ、この場合
少しでも増えると『無』を維持できないからな
だが、利用はできそうな感じだな、今度ためしてみるか
まぁ、ある程度は思った通りだったな、『無』には属する波動の核

がない状態
『風』『水』『火』『地』『闇』『光』がそれぞれを打ち消すからな
だから、核が無くなる、それは昔試したから分かっていたが
波動を食うとはな……大学で発表すれば賞賞えるほどだぞコレ
俺以外に『無』を使えるやつはいないから発表しても貰えないか……
まぁ、発表する気はないが
考えている内に旧国に着きそうだ

到着したが、ここは……火の国か？
火山……バーニングブラッドか？地図を見た時に確かあったはずだ
……あぁ、あったな
ここは火の国であっているな
早く目的地に行かなくては
はぁ、地図にどうして書いてないのか……
地道に探すしかないか……

「ベビーもう出てきていいよ」

ベビーは定位置の僕の右肩に乗る
ん？前から何かやってきたが？恐竜か……はぁ！？恐竜に炎が灯っているぞ！？大丈夫なのか！？
あ、火の国だからまぁ、全身が炎に包まれたやつがいるかもしれないから
これはカワイイものなのか？

「…お前どうした？」

「がう？（涙目で上目づかい）」

最近涙目で上目づかい流行っているのか？ましてやこんな小さい恐

竜にまで……
はぁ、頭でも撫ぜるか……首と尾に当たると火傷するな絶対
何故あんなところから炎が……気にしたら負けか？
はぁ、こいつといい、ウィンといい何故頭を撫ぜたら喜ぶんだ？

「がう、がう！！」

ついて来いか……
ドラゴンの言葉を生れてから聞いていたから会話できるが
恐竜の言語も分かってしまうとは……俺頭大丈夫か？

……
……
……

はぁ、恐竜がたくさんいるコロニーのようなところか
数で数えて２０あるかないかか……少ないな
ここが本拠地でなく、支部の１つか
はぁ、奥の方で一番偉そうな恐竜がこっちを睨んでいるのだが
行った方がいいな、周りの恐竜も睨んでいるし（ここに連れて来た
恐竜は何故か懐いているが）

はぁ、目の前に来たが背デカイな
まぁ、恐竜だから当たり前か、肉食っぽいから生態系のトップか？

「グルル（お主、何者じゃ、モノロフが懐いているのだが……）」

ここに連れて来たやつ、モノロフって言う名前なのか

「…グアルガ（…旅の者だ、ここに来た時にそこのモノロフに会い、ここに連れられた、懐かれているわけは分からぬが……）」↑次から恐竜の言葉を抜きにします

「ほぉ、そうか
我々を倒しに来た者ではなさそうだな」

モノロフが頬を足に擦ってきたのだが……もしその炎が服に引火したら危ないな
着替えの服１つしか持ってきてないぞ
燃やされたら危ないから頭を撫ぜて気をそらすか

「…あぁ、俺は『火の塔』を探しに来たんだ、何か知らないか？」

「知っているが、何か用なのか？
ワームはいなくなったといえ、封印龍が今いるんだ見つかったら危ないぞ」

封印龍？氷結界だったか？
確かここに残った部族の１つで有名なやつらだったから少しだけだが知っているな
まぁ、封印龍の事だけだが俺は

「…何故そいつらが目覚めている
氷結界が封印を守っているのじゃないのか？
もしや、さっき言っていたワームが関係あるのか？」

封印龍が3体とも目覚めたらどうなるか、あいつらが1番知っているのだろ

「お主何も知らないのか？」

「…すまないが教えてくれないか？
俺は今日ここに来たばかりなんだ
ここで起きたことは全く知らない」

「な、ここ来ただと！？どこから！？
もしや、ワームと同じで宙からか！？」

はぁ、ワームとは何か知らぬが、『宙』という単語が出て来たから
恐らく宇宙の者か……侵略者と考えるのが1番か……

「…今の話を聞くとワームとやらは宇宙からの侵略者なのだな
ここに来たのは、侵略しに来たわけでないから安心しろ
俺がどこから来たのかだ
新国と言えば分るか？」

ここは旧国と知っているが
僕が住んでいるところは何というのだか？
旧国の対をなすから新国でいいのか？

「し、新国だと！？外に竜巻があるのだぞ！？
ここに来るのは不可能に近いぞ！！」

新国であっていたみたいだな
はぁ、説明するのしんどい
封印龍の事を説明してもらえてないし……

「…来てしまったものは仕方ない
それをとやかく言われてもな
まぁ、その事はどうでもいいだろ
封印龍の事を教えてもらおうか」

「あ、そうだったな忘れていた
簡単に言うと戦争が起きたのだ
宇宙からの生命のワームとここに生きている部族の連合とのな
まず1体目の封印龍、ブリューナクが解放され、戦線は有利かと思われたが
X－セイバーがワームの餌食となり壊滅した
その後、他の部族もその影響を受け、ワームの餌食となり壊滅するのも時間の問題となった時に
2体目の封印龍、グングニールが解放された
氷結界としては内部で賛否を巡る口論がされたようなのだが
氷結界が作り出した『鏡』によってブリューナクが制御できていたからな
それで、グングニールを解放する事になった

我々ジュラックも戦線に出た時
運が悪く、友として我々と非常に仲が良かったフレムベルが壊滅になった時だったのだ
我々は怒りに狂いそうになったが、我、タイタンが何とか抑え冷静に戦線で戦った
それは良かったのだが、魔轟神がその戦争により目覚めた
魔轟神は昔に封じられた堕ちた神々
こっちの味方になれば百人力なのだが
ワームの味方についたのだ
封印された怒りで我々の敵方についたのだろうな

そやつらは堕ちたといえ神、力は我々の予想を大きく上回った
ワームで他が空いていない上にそやつらとも戦わなくてはならぬ
我々の負けは確実だったのだが、伝説のドラグニティと呼ばれる者
が我々の味方になったのだ
ドラグニティは魔轟神と同等くらいの戦力でな、戦線を元の状態ま
で戻した
だが、魔轟神が戦い方を変えたのだ
１つの部族を徹底的に攻撃し、壊滅させるという戦い方にな
その最初の餌食になったのが我らジュラックという訳だ
壊滅になりそうなその時、我々の神、
ジュラック・メテオが天より降って来て魔轟神を壊滅寸前まで追い
詰めたのだ……自身の命の引き換えに……
それは、我々ジュラックにも大きなダメージだったのだ
メテオが降って来た時、我々は２つのグループに分かれ魔轟神と対
抗していてな
１つのグループがメテオの作り出した火の波に沈んだのだ
だから我々の生き残りはここにいる２０程度
これは戦線から手を引くしかなかった
だが、メテオが作り出した火の波から我らの友が生まれたのだ
ネオフレムベルとなってな戦線へ出て行ったそうだ
その中に、フレムベルの神、エンシェント・ゴッド・フレムベルも
出陣していたそうだ
メテオとエンシェント・ゴッド・フレムベルのおかげで戦線はまた
大きく動いた
当然我らの有利でな

だが、おとなしく黙っているワームと魔轟神ではなかったのだ
ワームはゼロを魔轟神は３体の巨大な堕神と新しく作り出した堕神
が戦線へ出て行った
また戦線の状況は元通りに……いや我々連合軍の不利となった

ワームゼロは連合軍が対ワーム用兵器、Ａ・Ｏ・Ｊディサイシブ・アームズが完成に間に合い倒せたのだが
残る問題は魔轟神、ドラグニティが全てのナイトを出陣さしても叶わなかった
そこで、氷結界が最後の封印龍……トリシューラの封印を解いた
それがこの戦争の終わりとなった……全ては三体の封印龍が無に帰してな」

なるほどな、氷結界は鏡で封印龍を制御できていると勘違いをし、トリシューラの封印を解いたのか
あいつらめ、封印龍は見えない回路でそれぞれの意思を通じているというのを考えたら分かるだろ
くっ、やつらの失態のせいで僕の行動をさらに気を付けないとならないじゃないか
特に水の世界で……
はぁ、どうするか

「…なるほど、よく分かった
気を付けて行動する
説明をしてくれてた事に礼を言う

もう１つ質問はいいか？
『火の塔』にはどう行けばいい
そこに行かなくてはならないのだが」

タイタンが悩んだいるな
よほど何かあるのだろうか？
中に何があるかよく知らないのだが

「うむ、いいだろう

そなたは悪用しないだろうからな
モノロフ連れて行ってやれ」

……よりによってこいつかよ
なんだかウィンと似ているオーラがあるから不安なのだが
はぁ、他のやつらはイカツイやつらばっかだからな
モノロフみたいなやつがまだましなようだな
はぁ、じゃ行くか……

……
……
……

結構歩いたな
火の国だから気温が暑いからな
それで長距離歩くと疲れる

「…モノロフここなのか？」

うなずいたからここなのだろう

「…じゃここで少し待っておいてくれ」

正面に扉があるなその上に鳥のような模様がある
何の模様だ？まぁ、いいか、待たすのも悪い早く入るか

……
……
……

中は結構広いな
そこに階段があるから2階に行けばいいのか

……
……
……

2階に上がってと
ん？真ん中に何かあるな？なんだ？

「……な、何故こいつが……
親父が言っていた事は……
……はぁ、厄介なことを押し付ける
まぁ、するが……」

……

……
……

「…モノロフ終わったぞ」

はぁ、人の顔見るなり来るし……
はぁ、どうして俺はウィンのようなやつに懐かれる傾向があるのか？
はぁ、いらないスキルだ……

「…じゃ、戻るか」

……
……
……

「…タイタン、帰ってきたぞ
今日は世話になった、礼を言う
じゃ、俺は違う国に行く
また逢えたら逢おう」

「お主ちょっと待て
モノロフも一緒に連れて行ってみないか？
ものすごいお主に懐いているのでな」

はぁ……

「…断ってもついてきそうだから、別にいい」

「そうか、良かったなモノロフ」

だが、聞くことが1つある

「モノロフ、俺の弟になるか？」

「がうがう！！」

めちゃくちゃうなずきやがった

「そうか、今からお前は俺の2番目の弟だ
じゃ、行くぞ」

次の国はどっちに行くべきか？

第6話（後書き）

ＤＴの所、段的に間違っているところもありますが、ツッコまないでください。
ジュラックは私的に好きな部族なのでめちゃくちゃ出したかったので出しました。

『火の塔』で何していたか？いつか分かるはずです！
カンのいい人はもう分かっているかもしれませんね！

感想お待ちしています。

キャラ設定（前書き）

今更ですが、キャラ設定です。
完璧に忘れていました！

キャラ設定

ルア　役職　龍使い　性別　男

年齢　１５歳

身長　１６５ｃｍ

体重　測定不可
（武器等を服の中に入れているため
時々入れすぎた時、体重計が壊れる）

容姿　髪を膝まで伸ばしている、髪はストレートで銀髪
（髪の毛をとても大事にしていて、それ故、質はとても良く、
シットリサラサラ
髪の毛が傷まないようにとても気を付けている
シャンプーやリンスを調べつくし、１番気に入ったものを
今使っている
新商品が出た時点で買いに行きその日で調べる
今使っているシャンプー、リンスは、ブルーアイズシャン
プー、リンス
キャッチコピーは『ふぅん、これを使い、　強靭！無敵！
最強！となるのだ！！』
髪の毛の先はレッドアイズシャンプー、リンスを使っている
次の新商品はギャラクシーアイズシャンプー、リンス
カレンダーに書き込んでいる
店のお得意様になっていたりする）

顔は普通、目の色は赤

（普通にしていればかっこいい系に入っているが、不機嫌顔なので減点されている
銀髪ロン毛に似合う顔）

ダルクのような感じの体型

服　服は霊使いのコート（ベビーが入れるように中は大きめのポケットを付けた）
白Tシャツの上にフード付きの黒パーカを着て上と下を開けている
足にポケットがついている黒色の長ズボン、白ベルトを付けている
ファー尻尾（確かこんな名前…だっけ？）の色は透明
（光の反射で白に見える時がある）
ダルクと同じように、黒ベルトを斜めにつけ小物入れを付けている

その他　頭もよく、運動神経もいいという才色兼備な少年
だが、人付き合いは苦手な様子
ヒータ曰く、ツンデレ
ムカつくので言われたら睨む

顔はエリア曰く不機嫌顔ですが、
ベビーやモノロフは弟なのでふつう、いや機嫌よく話している

ウィンなどは無愛想に接しています
（大半の人には無愛想、無愛想の時は『…』を最初につきます

たまに普通の顔で話す人がいます、
恐らく本能的に馬が合うと感じたのでしょう）

剣を主に使うが、
ランスはもちろん斧など武器庫の中にあるものは全てマスターした
だが、剣が1番使いやすいそう
弓も使うが、本人曰く『…あれは必要時にしか使わない』だそう
基本的に左の腕に剣（魔術加工済み）を忍ばせている
杖は刀となり（魔術加工済み）鞘は邪魔になるので
『術式35番　武器召喚術ーアームズ・ホール』を使い、武器庫にしまい
戦い後にまた取り出して杖にもどす

エンディミオン大学を5歳で入学、9歳で卒業している
（その世界で1番難しいと言われる大学
龍使いというのを隠して入学、
父親が入学をすすめたが、入学後この世から去った）

父親は魔術師に殺され、母親は生まれた時に死んだと……
親はいない

リツとは何らかの関係がある

ベビードラゴン　通称　ベビー

容姿　ドラゴン

その他　ルアと生まれた時からの付き合い

リツとも知り合いである
ルアの使い魔
ルアの弟

ジュラック・モノロフ　通称　モノロフ

容姿　炎をともした恐竜

その他　非常に人懐っこい
それ故ルアについていくことになった
そしてルアの弟になった

キャラ設定（後書き）

こんな感じですかね？

感想お待ちしています。

第7話（前書き）

本当にこの小説どこに向かっているのやら……
書いている自分でも分からない……
初期設定からだいぶ離れている……
大丈夫かな？

第7話

視点　ルア

はぁ、やっと火の国から地の国へ来れた
ここ何もないな
砂漠が広がっているだけだし
まぁ、砂丘がないから『地の塔』の場所をすぐ見つけれたな
行くか……

……
……
……

地の塔か
扉の上に三首の生き物の模様があるな
まぁ、中に何がいるかもう分かったが

「ベビーとモノロフ、ここで待っておいてくれ」

干しレンガでできた塔か……崩れないよな

……

……

……

「…やっぱりこいつか
早く終わらせて、光の国に行くか」

……

……

……

「待たせたな、じゃ行くか」

「「がうがう！！」」

氷結界の封印龍が封印をとかれて、暴走しているのは本当っぽいな
火の国にはジュラックがいたが、ここには誰もいない
その上、何もない
あるのは砂漠と地の塔くらいだしな
光の国に行くと誰かいるかもな

……

……

……

地の国を出て光の国に着いたと……本当に何もなかったな……
ただ単に逢わなかっただけか？
はぁ、いいか
それよりも宿を探さないとな
野宿だと髪が痛む

ん？向こうの方に何かあるな行ってみるか

……
……
……

はぁ、『ヴァイロンの宿！！泊まれば運が上がるかもよ！！』って
いう名かよ……
ちゃんとした宿名を付けろよ……
しかもなんかウサンくさいし……
はぁ、他に宿なさそうだな、ここにするか……

「いらっしゃい！！おっ、兄ちゃん！！ここに泊まるのかい？
今なら１泊５０００万円の所、１５００円にするぜ！！」

なんだか全体的に丸型の機械みたいな天使だな

頭にハチマキしているからどっかの居酒屋にいそうだな
てか、大丈夫かここ
１泊５０００万円ってどんな超高級宿だ
ここ見た目すごいボロイのだが

「…魔術師１人、ドラゴン１匹、恐竜１匹が１泊泊まりたいのだが、いけるか？」

「いいよ、いいよ！！兄ちゃんだけに特別大サービス！！
全員で５００円にしておくよ！！
それからこの契約書にサインすると君もヴァイロンの仲間入り！！
どう？してみない？サインすれば無料にするぜ！！」

……本当にここ……いやこいつ大丈夫か？
頭絶対いかれているだろ
それからヴァイロンってなんだ？
ジュラックみたいに部族の名前か？
そんなに数すくないのかヴァイロン
そこまでしないと集まらないのか？

「…サインはしない、ほら５００円だ
部屋に案内してもらえるか」

「サインは明日に気が向いたらしたらいいぜ！！
年中無休でサイン設置場を開けているからな！！
で部屋はこっちだ！！ついてきな！！」

サイン設置場だけ年中無休なのかよ
ここのロビーが開きっぱなしって言う事なのか？
考えているうちに着いたし

「ここが君たちの部屋だ！！」

……こいつ正気か？
ここが５００円なのか？
……５０００万円は妥当だな
外はボロイくせになぜ中はきれいなんだ？
外のボロさはアンティークっぽくしたのか？

「…案内してくれた事に礼をいう
カギはチェックアウトの時に返せばいいのか？」

「おう、その時に俺に帰してくれたらいいからな！！
食事はどうするか？もう持ってこようか？」

ベビーたちは腹が減ってそうだ
俺も減っているから持ってきてもらうか

「…今からでいい」

ここのオーナーらしき奴は『おう！！楽しみにしておけ！！』と出て行った
この部屋だったら髪も痛むことはなさそうだ

「兄ちゃん！！持ってきたぜ！！」

早くないか？
……ここ本当に５００円でいいのか？
新鮮そうで豪華な刺身
そして、その刺身と同じで新鮮そうな色々な魚の切り身がある

恐らくナベ用だろう
真ん中にナベを置いているあたりあっているだろうな
そして、ごはんと魚が入った味噌汁か……
どうでもいいが魚多くないか？

「食べ終わったら呼んでくれな！！
片づけにくるからな！！」

といい丸い奴は出て行った
ここ、運営大丈夫か？
まぁいいか、さっさと飯を食おう

うまいな……
ベビーたちもうまそうに食っているし
この魚なんて言う魚だ？
ここでしか取れない魚とかか？
こんなの食べたことないが……まぁいいか

……
……
……

とりあえず食い終わったから丸い奴を呼ぶか

「兄ちゃん！！呼んだか？」

……はぁ、呼ぶ前にきやがったし……
細かい事を気にしたら負けか……

「…食い終わったから片付けを頼む」

「あいよ！！」

すぐに片付いたし……
こいつ妙なスキルあるな

「…オーナー、風呂はどこにある？
後で入りに行くから教えて欲しいのだが」

「ここを出て右をまっすぐ着いたらオメガ湯っていう温泉がある！！
ウチの自慢の温泉だ！！後でって言わずすぐに入って来るがいい！
！」

まぁ、いいか
今から入りに行くとしよう

「ベビー、モノロフ行くぞ」

「「がうがう！！」」

こいつら息合っているな
いつの間にか仲良くなったのか

……

……

……

……温泉の壁に『オメガ様サイコー！！キャッコイイ！！』などと書いているのだが……

気のせいだな、気のせいとしておこう

まぁ、そんな事よりここのシャンプー、リンスはどこのだ？

……ふーん、ヴァイロンシャンプー、リンスか……

どんなものか……ん？注意事項？

『このシャンプー、リンスを使うと頭がつるつるとなります。

ヴァイロンに入るなら、髪の毛などいらない！！ハゲてしまえ！！』

……使うのは止めておこう

2行目注意事項じゃなく、ただ単に恨みの類だな

はぁ、ブルーアイズシャンプー、リンスとレッドアイズシャンプー、

リンスを持ってきておいて良かった

早くギャラクシーアイズシャンプー、リンスが発売してほしいものだ

……

……

……

「…オーナー、ドライヤーは無いのか？」

「今持ってくるから待っててな兄ちゃん！！」

といい、ほんの5秒くらいで持ってくるこいつはなんなんだ

「スイッチが1，2，3となっていてな！！
1が低温、2が高温、3が超高温だ！！
気を付けて使ってな！！
それで頭火傷した客が後を絶たないからな！！」

『…そんなドライヤー捨ててしまえ』と心底思ったのは気のせいではないだろう
まぁ、低温を使うから関係無いが

……
……
……

髪の毛の手入れはこのくらいでいいか
じゃ、寝よう
オーナーが温泉に行っている間に布団を敷いていたそうだ
ちゃんときれいにおいているあたりが流石と言うところだろう

「モノロフ、その炎消すことできないのか？」

ためしに聞いてみたところ、すでに消して寝ていた

じゃ、俺も寝るか

……

……

……

はぁ、目覚めたらすぐオーナ来て、布団をどっかに持っていったし
あいつの行動力早すぎるだろ
まぁ、いいか
くっ、アホ毛が立ったし……戻ったな

「ベビー、モノロフそろそろ出れるか？」

ベビーとモノロフはじゃれているし……
朝の髪の毛の手入れする前にも同じ光景を見たのだが……ずっとやっていたのか？
まぁいいか、声をかけたらやめて来たから行くとするか

……

……

……

「…オーナー、チェックアウトに来た
思っていた以上の暮らしだった」

「そうだろ！！客を満足させるのが俺の仕事だからな！！
当たり前だろ！！」

「…オーナー、１つ聞きたいことがあるのだが
『光の塔』はどこにあるか知っているか？」

「ああ、知っているさ！！
この道があるだろ、それを真っ直ぐ行くとあるぜ！！」

「…そうか、礼をいう」

「おう！また来てくれよな！！」

もう二度と来ないだろうな
旧国にもこの旅が終われば来ないつもりだしな
あ、結局ヴァイロンってなんだったんだ？
まぁいいか

「ベビー、モノロフ、行くぞ」

……
……
……

意外と近かったな
扉の上には……よくわからんな、あの模様なんだ？
まぁいだろう、光の塔だ
あいつしかいないだろう

「ベビー、モノロフ、待っといてくれ
時間がかかるかもしれん」

……
……
……

「…はぁ、やっぱりこいつかよ
今までの奴より厄介だ
はぁ、やれるだけやるか」

……準備は終わり

「…目覚めよ！！光、最強の――――――！！」

さぁ、ここからか……

……

……
……

「終わったぞ
じゃ、行くか」

「「がう？」」

ベビーとモノロフが心配してきた
恐らく、塔の外にも響いたのだろう
厄介な相手だったからな
まぁ、成功したから何とかなったが

「大丈夫だ、成功した
だが、ここにずっといるのは危険かもしれない
だから次の国……水の国に行くぞ」

ベビーたちも分かったようで、早く行くことに了承した
はぁ、水の国か……
氷結界の封印龍に出会いたくないな
龍使いだが、今のあいつらはココロを開かないかもしれないからな

第7話（後書き）

地の国は氷結界の封印龍の餌食に1番あったので誰も出てきません
ジェムを出そうかと思ったのですが
出てくる機会を作れないのですよね……
考えたのが、ジェムがルアを攻撃するというのですが、
ジェムは余り戦いを好まないのでボツとなりました

ヴァイロンの宿のオーナーはヴァイロン・スフィアです
なんとなくかわいかったので出してみました
光属性で他にしようとしたのですが、
ワーム、魔轟神っていう危険な部族なのでヴァイロンっとなりました

感想お待ちしています。

第8話（前書き）

旧国編も折り返しにきました！

第8話

視点　ルア

くっ、水の国に入ってすぐに氷結界の封印龍に見つかってしまうとはそうじゃなければ今頃全力疾走で逃げてないのにな
やはり、運ないな……
こいつは封印龍の1体の……グングニールか？
ブリューナクは海竜、トリシューラは3つの頭があるから、この2体は違うな
やはり、グングニールか
どうやってまくか……
って、ブリューナクとトリシューラも来たし……
はぁ、泣きっ面に蜂だ……
ベビーとモノロフはもう限界そうだ
くっ、ここまでか

「お兄ちゃんこっち！！はやく！！」

なんだか、白い長髪のガキに呼ばれたのだが
くっ、封印龍が本格的に攻撃を開始しだした
仕方ない、あいつの所に行くか

「ベビー、モノロフ行くぞ」

ちっ、グングニールが邪魔しに来たな

「…龍使いとして命じる
そこをどけ！！」

グングニールは退いたな
今のは龍使いの力と全く関係ないのだが
ただ単に言っただけで退くとは
こいつ気が弱いのか？
まぁ、退いたからガキの所に着けたのだが
何故こんなところにいるのかは後で聞くとしよう
今は俺の後ろで攻撃しているトリシューラをどうにかしないとな

「おい、お前
ベビーとモノロフを先に連れていけ
後で追いつく」

「じゃ、この道をまっすぐ行くから
すぐ追いついてね」

あいつらは行ったな
はぁ、龍相手にあまり戦いたくないのだが
この場合はそんな事言ってられないな

「…光霊術ー光の護封剣」

光の剣が出てきて、封印龍の周りを囲ったな
これであいつらはしばらくの間動けない
だが、もう1つ術をかけておいた方がいいな

「…闇霊術ー悪夢の鉄檻」

鉄でできた檻を護封剣の上からかけておく
俺が入りそうになっていたから少し危なかったな

あいつらと共に中にいれば命が何個もあっても足りないぞ
1、2体なら何とかなるが3体だからな
さて、追いかけるとするか

……
……
……

やっと追いついたか
封印龍で結構手間をとっていたっぽいな
まぁ、この道が真っ直ぐで少しありがたかったな
後ろにいる封印龍を確認できて、前にいるガキとベビーらを確認できる
まぁ、封印龍があの術から抜け出したら、すぐ追いつかれるが

「おい、どこに向かっているんだ」

「ボクの隠れ家だよ
後もう少しだからね
ほら、ここ！！」

……何もないのだが
あぁ、俺の家と同じように地下にあるのか
こいつも開けているし

「あの子たちがどこか行くまでここに隠れていよ

ボク、お兄ちゃんと話がしたいからね」

……こいつと話する事全くないのだが

まぁ、封印龍がどこかに行くまではここにいるのはいいだろう

道を左にまがったから封印龍からは見られてないし

ベビーらとガキはもう入ったな

じゃ、俺も入るとするか

……

……

……

入ったのはいいが、狭くないか？

まぁ、少しの間隠れるだけだ

「そういえばお前誰だ？」

「ボク？ボクは氷結界の破術師だよ

お兄ちゃんは？」

……それが名前かよ

まぁいいか、封印龍がどこかに行けばもう会わないんだ

「ルアだ」

術が今外されたな

あいつらは今頃、俺らがどこに行ったか探しているはずだろうな

「そうそう、お兄ちゃんってどこから来たの？」

「新国だ
で、火の国、地の国、光の国をまわってきた」

「そうなんだ！！」

何こいつ興奮しているんだ？

「じゃじゃ、ボク以外の氷結界にあった？
ボクみんなを探しているんだ
封印龍が暴走したからみんなと離ればなれになっちゃったから」

氷結界を探すためにここに残り
封印龍に見つからないようにしていたのか

「残念な事に1人もあっていない」

「そう……」

なんだか飼い主とはぐれた子犬みたいになっている
そろそろ封印龍が遠くに言った頃だろう
気配も感じ取れないからな

「俺はそろそろ行く」

「どこに行くの？」

「まずは『水の塔』に行き、そのあと風の国だ」

……何故こんな奴に説明しているのやら

まぁ、いいか、世話になったんだ

「じゃボクも連れて行ってよ！！

ここにずっといても誰にも合わないかもしれないからね！！」

……飼い主を見つけた子犬のような目で見られたのだが

はぁ、どうするか

「はぁ、まぁいいだろう」

……

……

……

「破術師、モノロフに乗れ

そっちの方が早い」

こいつ結構歩く速さ遅いからな

モノロフに乗ればちょうどいいだろう

「モノロフ、破術師が乗っている間、炎を消しておいてくれ」

さぁ、ここからどうするか

破術師は水の塔の場所は知らないからな
地道に探すしかないか
って

「ブリューナクに見つかった」

はぁ、こんな時にブリューナクと合うことになるとか

「ベビー、憑依装着だ」

ベビーを旧国にきた時みたいに、俺の魔力を憑依させ巨大化させる
顔も大人っぽくなっているからな
力も大きくなっているのだろう

「モノロフ、破術師さっさと乗れ
ブリューナクが攻撃する動きに入っている

乗ったな、ベビーできるだけ早く」

ベビーが早く飛んだから何とかブリューナクの氷弾に当たらずにすんだ

「ベビー、このまま真っ直ぐだ
後ろにいるブリューナク……封印龍らは俺に任せて気にせず飛べ」

いつの間にかグングニールとトリシューラが来ていたし
はぁ、あまり使いたくなかったが使うしかないか……

「…術式３５番　武器召喚術ーアームズ・ホール」

左手の近くにできたワームホールから、弓を取り出す
はぁ、魔力消費量を抑えるか

「破術師、前に行け
それで、前の様子を教えてくれ」

破術師を前に行かしたから、僕はベビーの尾の先端に行くか
はぁ、厄介だ
氷壁が両脇にあるな、これを使うか

風の波動をコントロールし、風の矢を作る
簡単そうで結構難しんだよな
他の波動を混じらせばダメだからな
と考えているうちにできたな

「…ギャラドボルグ！！」

真名を解放し、左側の氷壁に当てて崩す
それが丁度、封印龍らの目の前に落ちる
封印龍があわてている間に

「…ギャラドボルグ！！」

2発目を右側の氷壁に当て、封印龍の目の前にある氷の山の上に落
とす
これで時間を稼ぐことができるだろう

「お兄ちゃん、頭を下げて！！」

破術師の言う通りに下げると

ちょうどさっきまで頭があったところに木の枝があった
破術師が言ってくれなければ当たっていただろう

「破術師、礼を言う」

くっ、封印龍が追ってきたか
ん？追うのを止めた？
何故だ？

「破術師、ここには何がある？」

「えーと、確かリチュアの領域かな」

リチュアの領域に入ったから追うのを止めたのか
封印龍が縄張りとしているのは氷結界の里だけだからか

「ベビーもういい
ありがとうな」

ベビーを止めさせて、憑依装着のために使った魔力を返してもらう
リチュアか……どんな部族だ

「破術師、リチュアってどんな部族なんだ？」

「確か、儀式を中心に活動しているのだったかな？
この前、ガスタへ侵攻をしたらしいけど
インヴェルズっていうのがリチュアやガスタを含む５つの部族に侵攻したから
ガスタへの侵攻を止め、侵攻された部族の１つであるヴァイロンと共に戦ったとか

その中にガスタもいて、今は仲良くなっているよ
リチュアとガスタが手をあわし、イビリチュア・メロウガイストが生まれたのだって」

「とりあえず、リチュアに会いに行くか」

はぁ、どこにいるのやら

第8話（後書き）

中途半端で終わりです

1．氷結界の破術師が登場！！

2．ルアと共に行動をする！！

あれ？これって仲間ＧＥＴだぜ！！の旅じゃないよね……

まぁ、ルアは破術師には普通に話しています

髪の毛が似ていたからでしょう

ギャラドボルグという名前はギャラクシーとカラドボルグからとって作りました

矢は自身の波動で生成します

感想お待ちしています

第9話（前書き）

旅行に行っていて最近更新ができませんでした。

第9話

視点　ルア

リチュアの領域に来たが、だれもいないが……
水の塔の手がかりを探さないといけないのにな
はぁ、水の塔のある場所が氷結界の封印龍の領域に入ってなければ
いいが
また封印龍に会うと危険だ
俺とベビー、モノロフだけなら何とかなるが、今は破術師がいるか
らな
こいつは氷結界の生き残りを探すという目的がある
その目的を潰したくない、だから安全にさせておきたい

「お兄ちゃん、どうしたの？
考え事？さっきから浮かない顔をしているけど……」

はぁ、こいつに心配されるとか
こいつがその原因というのにな
まぁ、俺が連れて行くと決めたから愚痴は言わないが

「ただ単に考え事だ
リチュアは今、危険な部族ではないのだろ？お前がそのような事を
言っていたが
だが、いきなり攻撃をしてくるやもしれん
その時の対処をどうするか考えていただけだ
それからモノロフに乗れ、お前歩くの遅いから」

「おいおい、俺らがいきなり攻撃するわけないだろ

まったく、俺らだって余り戦いを好まないんだ
ガスタに侵攻したのだって、ただ資源を求めるために仕方ないことだったんだぜ」

破術師がモノロフに乗ったのを見たのと同時に
前から変な奴がやってきた
なんだあいつ？サメか？いやサメの顔をした人か？
体を見ると人型だしな
はぁ、考えるの面倒だ
サメでいいか

「それから俺の事をキモサメや
キモイルカの親戚じゃね？
って言った奴に対しては手加減せず殴るからな」

「…そんな事興味ない
お前はリチュアの中の一人か？
話を聞くとそんな風に聞こえるが」

「ああそうだぜ！！
俺はリチュアのエンジンの事アビスだ！！
リチュアのためにエンジンのように働いているんだぜ！！
リチュアの仲間に過労死しないように心配されるくらい働いているんぜ！！」

「…あっそ
リチュアのエンジンだったら知っているか？
水の塔がどこにあるのか？」

「俺は重労働を基本としているから

情報はあまり知らないな
そういう事だったらヴァニティが知っているかもな
そいつはリチュアの里に今いるけど行くか？
俺は今から帰る所だからついて来るなら今のうちだぜ！！」

ヴァニティ？英語のｖａｎｉｔｙか？
確か意味は無価値、無益、価値のないもの、無意味な事だったか？
そんな名前の奴が情報持っていると思えないが
今の所知ってそうな奴はそいつしかいないな
だが、リチュアの里だ
こいつの仲間がいるという事だ
俺らを襲うという事もある
こいつがそんな事をする奴じゃなさそうだが
第一印象で人を判断すれば痛い目にあうからな
強盗をするようじゃない奴が強盗をするとかあるからな
破術師がいるんだ、どうするか

「お兄ちゃん、どうする？
ボクは行ったほうがいいと思うけど」

こいつは行きたいのか？

「お前は行きたいのか？
そうだったら行くが、もしかしたらお前の仲間がそこにいるかもしれないからな」

そういうと破術師が僕の耳元に近づいてきた

「（ねぇ、お兄ちゃんリチュアに行きたいけど
リチュアにいる間は念のためにボクが氷結界の者だって事を隠して

て）」

リチュアと氷結界には何かあるのか？
場所的に近いしな
まぁ、こいつがそういうならそうするか
だが、こいつの事なんて呼べばいいんだ？
『ガキ』でいいか

「…アビスだったか？
俺らもリチュアの里に行くから、連れて行ってくれ」

「あいよ！！じゃついて来いよ！！って言ってもすぐそこなんだがな
歩いて2、3分だ

それからお前が心配しているかも知れないが
リチュアの奴らは里に訪問しに来た奴には襲わないから安心しろ
攻撃しに来た奴などは徹底的に攻撃するが
まぁ、俺が説明するから大丈夫だと思うが、変な素振りをすると危ないかもな
襲われたくなかったら変な素振りさえしなければ大丈夫だ
だからしない方がいいから気をつけろよ」

「…そうか、だったらしないように弟共とこのガキに守らせる
俺はする事はまずないからな
俺だって争い事は好きじゃない
自分の山にわいてくるアンデット（バカ共）を倒すのに争うくらいだな」

「ははっ、お前も大変だな
お前とは気が合いそうだ！！」

さぁな、俺はそんな事は思わないが
はぁ、最近いろんな奴と関わる事が多くなったな
こんな事が始まったのは、あいつら霊使いに会ってからか？
いや、リツとカオルに会ってからかもしれないな
ふっ、もうどっちでもいいか
どっちもうるさい連中だからな

「そういえば、お前とお前の近くにいる
子供のドラゴンと炎を灯した恐竜とお前に髪が似ている子は誰なんだ？」

「…言ってなかったか？すまなかったな
俺はルアで、この子供のドラゴンは俺の弟の1人のベビー
こっちの炎を灯した恐竜はモノロフ、2人目の弟だ
でこいつは…旅の途中で出会い今は一緒に行動をしている奴だ」

こいつの名前考えた方がいいな
リチュアの里で聞かれたら、氷結界の破術師って言わざるおえなくなるかもしれないしな
まぁ、それは歩きながら考えるとするか
氷結界の破術師だから、氷結界と破術師から連想したものがいいか？

「へぇ、ドラゴンと恐竜が弟って変わっているな！！」

「…本物の弟じゃないからな
俺の親はちゃんとした人だからな
ベビーもドラゴンから生まれ、モノロフも多分、恐竜から生まれただろうな」

「お前のそのようなの嫌いじゃないぜ！！

いや好きな方かもな！！」

一瞬、背筋に悪寒が走ったのだが

「まぁ、恋愛的な好きじゃないから安心しろよ
ただ性格が好きなだけだ
やっぱりお前とは気が合いそうだ！！」

はぁ、そうか良かった
考えたら分かるが
恐らく知り合いにエリアがいるから悪寒が走ったのかもしれないな
はぁ、俺は同性愛にも兄弟愛にも興味はないんだ
なのに何故知り合いはそんな奴らばかりなんだろうか

「着いたぜ！！
ここがリチュアの里だ！！」

ここがリチュアの里か……
海と岩陰に隠れている小さな町っぽいな
タコなどがいるからリチュアの里であっているっぽいな
リチュアはこんな海の者が人型になっている部族なのか？

「アビッ君おかえり！！
仕事をしてくれて助かるけど、余り無茶しないでね！！」

「エリアル嬢、ただいまっと！！
それから、こんな所にいたら危ねーよ
ノエリアのババァの所かエミリア嬢の所にいとかねーと！！」

「だって、ノエリアは怖いし、エミリアはスピリットだし

だからここでみんなの帰りとかを見ているんだよ！！」

……こいつエリアじゃないのか？
いや、エリアと話し方が違う
それから、水の魔力の量は変わらなそうだが
こいつ中に邪悪な者がいそうな感じがする
こいつ何者だ？
他の奴らは海鮮者（適当に名付けたが）だがこいつは人だ
リチュアの上の奴か？

「アビッ君、この人たち誰？」

エリアルだったよなこいつ
こっちに興味津々しつつ、殺気を放っているな
ちょっとこいつ危ないぞ、いやだいぶ危ないな

「こいつらはな、旅の者でリチュアの里に来たいって言ったから連れてきたんだ
危険な奴らじゃない、安心できる奴らだ（ほら、エリアル嬢にご挨拶をしろ）」

エリアル嬢ってこいつ結構えらい立場そうだな
アビスに挨拶しろって急かされたからするか
アビスがああ言ったから殺気は少し緩んだが、完全には緩んでないからな

「…俺の名前はルアだ
このドラゴンはベビー、恐竜はモノロフ、こいつらは俺の弟だ
で、こいつは僕たちと今一緒に行動している氷華（ひょうか）だ」

氷華は当然破術師の事だ
氷破ってしようとしたが、言いにくいから『破(は)』を『華(か)』にした
こいつの性別は知らないがこの名前は別にどっちでも使おうと思えば使えるだろ
女子の方が多いかもしれないが……
破術師が驚いた顔をしているが仕方ないだろうな
アビスがいたから打ち合わせができなかったし

「どうしたガキ？俺がお前の名前をいうのはそんなにおかしいのか？
（お前が氷結界の者とばれたら面倒だ
だから勝手に名付けた、リチュアにいるだけでいい、この名前を使え）」

エリアルらにばれないように破術師に言う
破術師は分かったようだ

「お兄ちゃんはいつも、ガキっていうから驚いちゃったんだよ！！
（それと、氷結界には役職を与えられるだけだから
名前を付けられるのが初めてだったからね）」

なるほど、だから初めて会った時に氷結界の破術師と名乗ったのか
氷結界はそのような部族か
はぁ、おかげで名前を考えるという面倒な事をやらされた

「へぇ、そうなんだ
私はアビッ君が言ったようにエリアルだよ
よろしくね！」

殺気は消えたな
はぁ、警戒するのは分かるが何故殺気を放つ？

リチュアがそのように教えているからか？
はぁ、考えるの面倒だ

「…あぁ、よろしくな」

「じゃ、俺はこいつらをヴァニティの所に連れて行くからな
エリアル嬢、そこにいるなら気を付けてくれよ！」

はぁ、破術師が氷結界とばれてないようだ
これからヴァニティの所に行くが、どのような奴か？
情報を扱うという事だから上層部じゃないとうまく扱えないからな
こう考えると人か？だが、エリアルだけが特別とすれば海鮮者か？
はぁ、会えば分かる事だ、今はこいつについていくか

……
……
……

何やら会議室のような扉の前に来たが
中から2人の話声が聞こえるな
少なくて2人がいるという事か
アビスがノックをすると『いいぞ』と言われ入って行ったな
俺もついて行くか

「アビスお帰り
この前壊れた外壁は治ったかい？」

「ああ、しっかり直してきたぜ！！
それと、ガスタのウィンダール殿がお越ししていたのですか！！」

「いやいや、そんなに恐縮する事はない
ただヴァニティと打ち合わせをしていただけだ」

ヴァニティは人だったか
なんだか厚そうな生地の服を着た青年か
で、アビスが敬語で話したのはウィンダールか
ガスタと言っていたな
はぁ、こいつは緑の生地の服か

「アビス、そこの人達は？」

「お前に話をしに来た奴らだ
今は無理そうだから後でまた来る」

まぁ、かつて敵どおしの奴らがこの部屋にいるんだ
どっちだってまだ完璧に信用したというわけではないだろうな
厄介ごとに巻き込まれるのはなれたが面倒だ
巻き込まれたくないから後で連れてきてもらうか
それとカードが散らばっているのは何故だ？

「いや、別にいい
もう話は終わってただ世間話をヴァニティとしていただけだ
私はイグルスが今ガスタの里から来るまでここにいるが
私を気にせずにヴァニティと話をすればいい」

世間話か

世間話をするという建前で、相手の中を探るのが一般常識だからな
ウィンダールからすればもう少し探りたかったのかもしれないが
あいつがもういいと言ったんだ、遠慮などしなくていいだろうな
で、ウィンダールはカードの回収をそそくさとし出したな
実は遊んでいたのじゃないのか？

「…そうか助かる
まだ名乗ってないからまずは名乗っておこう
俺はルア、このドラゴンがベビー、恐竜がモノロフ」

「で、ボクは氷華だよ！！」

最近自分の名前を言ってなかった事が多いからな
先に名乗っておいた方がいいだろう
で、このガキは何故自分から名乗りだした？
はぁ、どうでもいいかそんな事

「私はヴァニティだ
リチュアでは情報を扱わせてもらっている
それと見ての通り、ガスタとのやり取りもやらせてもらっている
情報を聞きたいのならば私を訪ねればいい
リチュアの不利をなる事は教えないけどな！」

「私はウィンダールだ
ガスタの賢者をやっている
ガスタに用がある時は私を訪ねてくるといい」

ヴァニティが情報を扱っているのは自称でなければいいが
それとガスタは風の国にありそうだ、こいつから風の波動を感じる
からな

水の塔を行った後に行くとするか

「で、私に用があってわざわざ来たのだよね
何の用だい？」

「…水の塔の場所を知っているか？
アビスが知っているかもしれないと言ったから来たのだが」

「あぁ知っているよ
でもあそこは扉が開かないから行っても無駄だよ
ただの観光目的だったら意味はなくは無いけど」

「水の塔を行くのならば、私が住んでいる風の国にある風の塔にも
行くのだろ
あそこも扉は開かない、他の塔も開かなかったはずだ
まぁ、観光目的ならガスタを訪ねるがいい
その時に教えてやる
ガスタは、リチュアと水の塔との延長線上にある
すぐに見つかるはずだ、私は迎えが来たから帰るとする
ヴァニティ、また今度話をしよう」

と言ってウィンダールはデカイ鳥に乗って帰って行ったが
扉が開かないか……親父のせいかもな
多分、俺しか開かないようにしたのだろうな
はぁ、観光目的と言ってさっさと教えてもらうか
ここに長居はしたくないからな
明日までには風の国に着きたいからな
で明後日に闇の国に行き
その日で家に戻れば例のアンデットが現れるまで余裕を持てる
３日間だけ旧国に居た事だから、家に帰った４日後に出てくるな

まぁ、今は水の塔の場所を聞くとしよう

「…別に中に入れなくていい
で、場所はどこだ？
その後でガスタの里に行くという用事が出来てしまったからな
早く行きたいから教えてくれないか？」

「場所は確か、この先に氷結界の里があるだろ
そっちには行かずに、反対側の道を行くと見える
ガスタへの道は、さっきウィンダールが言った通りだ」

「…そうか、礼を言う
じゃ僕らは水の塔に向かうとする」

「そう、じゃまた来た時はよって来たらいい
敵にならない限り、いつでも歓迎するよ！！」

「おう！俺も歓迎するからな！！
次はゆっくり話をしようぜ！！」

「…ああ、よった時にな」

はぁ、ヴァイロンの宿同様にここも　もう来ないだろうな

……
……
……

ここが水の塔か
他のと同様に扉の上に模様があるな、これは普通の模様だ
で、この先がガスタの里と
はぁ、今は昼くらいか
ガスタに着くには夕方になっているかもな

「ベビー、モノロフ、破術師はここで待っていてくれ
すぐに終わらして来る」

「お兄ちゃんは何しに行くの？」

そういえばこいつにはまだ言ってなかったな
モノロフにはベビーが火の塔で待っている間に言ってくれたそうだが

「ここに親父が封印している者がいる
それを解きに来ただけだ」

「封印したのを解いていいの！？」

「親父がそう遺書に書いたんだ
別にいいだろうな
じゃ行って来る」

……
……
……

「…はぁ、こいつが目覚めれば封印龍も暴走をやめなければならないだろうな
目覚めよ、水、最強の――――――」

……
……
……

「おい、早く行くぞ！！
ここに居れば巻き込まれるぞ！！」

そう言うと全員が一斉にリチュアとは反対方向の風の国の方へ行った
破術師はモノロフに乗っているから大丈夫だろう
はぁ、封印龍が暴走しているから本格的に目覚めたら行くだろうな
もうだいぶ走ったから巻き込まれる事はないな

「もう歩いていい
ちょうど、出て行ったからな」

後ろから青い流星が氷結界の里の所に行った
俺の予想が当たったな
ここまで非難しておいてよかった
元々、水の国の王だ、自分の領域で暴れている奴がいるのなら行く

のは当然だ

「水の塔から風の国は近いのか
もう見えて来たな」

地図で念のために確かめたが
水の塔の場所だと思われる所から風の国は近いな
ガスタには夕方よりも早く着くかもな

「風の国には、いるかな？
やっぱり水の国にはもういないよね
リチュアがいるし、それに封印龍もいるし」

「そういえば、リチュアと氷結界は仲が悪いのか？」

「リチュアは氷結界が使わなかった力を使うって教わったよ
だから氷結界はリチュアには好感を持てないのだって
でも、リチュアは氷結界の事はどう思っているかは知らないよ」

氷結界が使わなかった力？まぁ深追いを止めておこう
こう言い回しをする事は言いたくないのか、知らないのかだろう

……
……
……

「風の国に着いたな、ここはミスト・バレーか
はぁ、このまま真っ直ぐか……モノロフ、破術師を連れてあそこの
陰に隠れてくれ」

風の国に着いた途端、前方から殺気が来たな
エリアルも殺気を放っていたが、あれの倍以上の殺気か
しかも俺に向けているって、はぁ、厄介事が起きそうだ……
モノロフは岩陰に隠れたな、炎もちゃんと消してある
だが、影が少し薄いからばれてしまうかも知れないな

「闇霊術ー漆黒のトバリ」

闇を増やすために漆黒のトバリを使ったが上手くいったな
トバリの中からは闇が見えないから、普通の景色だ
だから危険を感知すればすぐに逃げられるだろう
殺気が段々と近づいて来たな……

「モノロフ、破術師、何があっても絶対にそこを動くな
俺がいいと言うまでな」

前から風を切る音？
槍か……くっ、避けれないな

「…フローラル・シールド」

あらかじめコートに仕掛けておいたシールドを発動し
コートでガードする
そうすると、槍が弾けて落ちたが、元の持ち主がいると思われる方
角に行ったな
こっちもガードした時にアームズ・ホールを発動し、槍を取り出した

「…いきなり攻撃とは結構なご挨拶だな」

「何故ここにいる、龍使い」

前から白いドラゴンに乗った白い戦士らしき者がこう言ったが
こいつ、俺が龍使いて何故分かる
こいつが白いドラゴンに乗っているからか？
ドラゴンに乗る部族は確かドラグニティだったか
昔に旧国の事を調べた時に氷結界の封印龍と共に書類から出てきた
覚えがあるな

「…ここにいて何か悪いのか、ドラグニティ
貴様らは『竜の渓谷』に住んでいるのだろ、ミスト・バレーの事は
関係ないと思うが」

「この旧国は昔から我々ドラグニティが住んでいるんだ
だから我々が旧国を管理していいと思うが
我々の旧国に貴様がいるのは悪いに決まっているだろ
貴様ら、龍使いがこの世界の得となるか」

「…ここに昔からいるから管理していいだと
ふっ、戯言の限度を超えたな
『お前らが旧国を管理する』とは傑作だ
管理する？ならば戦争をもっとこんなにひどくなるわけないだろ
何故、三体目の氷結界の龍の解放を許した？
これがお前らの管理の仕方か？
管理を適当にしすぎるだろ、これで管理をする権利をとれるとは思
えないな
龍使いがこの世界の得とならないのもお前らが決める話ではない」

「くっ貴様、言わせておけば好き勝手言いやがって」
「…俺の言ったことが何か間違っているか？
管理する奴が適した奴じゃないとお前らがしたみたいな事が起きる
だから昔から住んでいる奴がなるというのは間違いだ」
『上に立つ奴が力のある奴じゃないとならないのと同じだ』とも付け足した
まぁ、人徳も必要だけどな
そういう点なら、俺は管理できないし上、にも立てないか
まぁ、する気が全くないからいいが
「くっ、ならば我が貴様より力がある事を証明し
貴様の上に立ち、ここから追い返してやる」
「…はぁ、どうしてそうなる」
「白き魔槍ーゲイボルクが貴様を討つ！！」
くっ、持っている槍を所構わずに投げやがって
このままじゃあいつらに当たるのも時間の問題だ
無駄な争いは嫌いだが仕方ないな
「ベビー、憑依装着」
ベビーに俺の魔力を憑依させ、成長させる
これで戦う場所を互いに空で殺りあえる
「…槍の使い方が下手だ

これで何故ナイトの称号を持っている事やら」

そういい、槍をこいつの胸元に入れようとしたが
こいつが乗っているドラゴンが危険を感知しその場から移動し、かわされた
ドラゴンのおかげで何とかなっているな
そうじゃないとこいつはすぐに殺されていただろうな

「貴様もドラゴンに乗って戦いができるだと
だが、こういう戦場では我々の方が熟知しているはずだ、問題ないな」

このままじゃ拉致があかないな
こいつはドラゴンに乗りながらの戦いが慣れているが
こっちはこれが初めてだからな
長期戦になればこっちの負けが確実だ

「そこだ！！」

そういい槍を投げてきた
かわせるな……ちっ、そこにはあいつらが

「…くっ、着替えがあるから大丈夫か」

槍が腹に刺さり、服が血に染まった
槍が腹から抜け出してこいつの手に戻る動作をしたから、傷口が更に開いたな

「ふっ、この程度も避けられないとわな
貴様より我々の方が強いな」

言われても仕方ないな
腹から血が大量に出ているのが服越しからでも分かる状態だしな
ちっ、クズのような状態だ

「お、お兄ちゃん！！危ないよ！！もう止めて！！」

「がうがう！！」

あいつら、出てくるなと言ったのに何故出てくる
ここは戦場だぞ

「ほぉ、仲間を守るために自身を盾にするとはな
いい物を発見した
あれを人質とするとしよう
これも立派な戦術だ」

こいつ……
頭の中のどこかが切れた音が聞こえたが、気のせいだろう
僕がこんな奴相手にキレるわけがないな
普通だったら

「…そいつらに手を出してみろ！！
お前らを……殺す」

何故、こんなに殺意が出るのだろうか
何故、こんなに頭は冷静でいるのに体は熱くなっているのだろうか
何故、いつの間にかアームズ・ホールを開き、弓を取り出しているのだろうか
何故、『無』で作った矢が出来て、手にあるのだろうか

何故……もういい、こいつは警告を守らずに俺の横を通り過ぎようとしている
もう、殺るしかないな

「ははっ、そんな体じゃ我々を止められない
無駄なあがきだ！！」

「…儚く散れ
ギャラドボルグ？」

無色透明な矢が見事にこいつの胸に突き刺さり、貫いた
そして惨めに落ちていった
胸の真ん中に円形の穴を抱えて
白いドラゴンは……そいつのもとに行ったな
あいつは人質を取る事に少し反対していたっぽいが、結局は賛成し、行ったからな
同情はいらないだろ
くっ、？はやはり体への反動が強い、魔力を普通のより倍以上使うからか
腹からの大量出血の上にこれを使ってしまったからな
これはずっと前に考えて作ったが今まで使う事がなかったからな
これが初めてとなったが、失敗せずにすんでよかった
はぁ、意識の底に堕ちそうだ

「ベビー、あいつらのもとに下ろしてくれ」

ベビーはそれに従い、地上に降りたが、なかなか憑依装着を解除しない

「俺は大丈夫だ、だから解除してもいい」

そう言うと、渋々だが解除してくれた
はぁ、服が結構汚れている
髪が汚れてないからいいとするか

「おい、お前ら何故出てきた
俺があいつを殺らなければ、お前らが危険な目に会っていたかも知れないんだぞ
そういう事分かっているのか」

「ごめんなさい」

「がうがう」

はぁ、本気で謝っているようだからもういいか

「はぁ、次はちゃんと守れよ」

くっ、あいつらの前だから普通のように話していたが
そろそろヤバいな
自己治療の魔術をかけておくべきだったな
はぁ、魔力の量を調べる術を中心にしないべきだったか？
まぁ、魔力の量を調べるのは結構役立っているからいいとするか
だが、この傷はどうするか
ガスタまで、体が持つか
いや、無理かもな
そんな事より、白いドラゴンがゲイボルグの死体を運んでいる
他のドラグニティに報告するのか？
……来た方向と違う方向に行っている
竜の渓谷はあいつらが来た方向だから、仲間に報告する可能性が低

くなったが
はぁ、ドラグニティとは元々仲が悪いようだったが
更に悪くなっただろうな

「行くぞ、ガスタの里には夕方までには着きたい
夜になると何があるか分からなくなるからな」

そう言って歩きだすと、俺の後についてくる
後ろだからこの表情や顔色を見られる事はないだろうな
はぁ、みっともない姿だ
出来るだけ普通を装っていよう
恥ずかしいからな

「モノロフ、とりあえず炎は消しておけ
背中に乗っている破術師が熱いだろうからな
それから、それを見た奴が襲ってくるかも知れない」

この状態なら戦えないぞ
一方的に攻撃をされるのを黙って受ける事になる
たのむから出てくるなよ
ちょっと足が動かなくなってきたが、まだ大丈夫だろう
はぁ、ガスタの里はまだかよ
憑依装着をして、ベビーに乗って行くと早く着くが
あれは発動時に魔力を結構使うから余り使いたくない
時間に比例して足らなくなったら僕の魔力を食うし
それに今はそれをするだけの十分な魔力がないからな
はぁ、結局歩きしかないか……

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「ダイジョウブダ、モンダイナイ」

「片言になっているけど！！」

「キノセイダ」

こんな事で弱音をあげたら、親父に笑われる
だが、さすがにヤバいな
親父は『治』の魔術を使えるから、これくらいは何ともないが
俺は使えないからな
そろそろ考えるのも止めようか、いや、止めたら体の変化に気づか
ずに倒れるかもな
はぁ、面倒だ

……

……

……

やっとガスタの里らしき所に着いたな
違うくてもここで泊らさせて貰うか

「やぁ、待っていたよ、ルア」

ウィンダールか
じゃ、ここはガスタの里であっているのか
……風景がウィンダールから地面になっただと？

はぁ、とうとう倒れてしまったか
早く起きないと髪が汚れるし笑われる
って、体が動かない
なんだか、騒いでいるな
だけど、騒ぎ声が遠くに聞こえる
ははっ、ベビーとモノロフ、破術師が大慌てで近づいて来たな
何を言っているんだ？聞こえないな
はぁ、こんなに頭は動くのに体が動かないって、なんだか…さい…
あ……く……D……

……
……
……

……ここはどこだ？
はぁ、ベッドにいつの間に寝ていたか
薬品臭い、そんな事はどうでもいいか、起きるとしよう

「くっ、はぁ、そういえば腹に傷があったな
それで、ガスタの里に着いた途端、倒れたのだったな」

じゃ、ここは病院的な所か
薬品臭いし、腹に包帯を巻いている所を見るとそうであっているだろう
はぁ、こうはなりたくなかったのにな

「起きましたか？
動きたいのかもしれませんが、ゆっくり横になっていてください
まだ傷口が完治していませんので」

緑の髪のノロマそうな顔の奴にそう言われ横にさせられた
包帯が赤くにじんだから仕方ない
言い訳をして、出ていけないな
窓越しで見るともう真っ暗だ
はぁ、風の塔の場所を聞くのは明日にしようか

「…おい、俺の連れはどこにいる？
何か変な事をしていたら、許さないからな」

「大丈夫ですよ
お連れさんは今、ウィンダールさんが案内した部屋にいるはずですよ」

「…そうか、なら良かった
それから、頭を洗いたいのだが」

「我慢してください」

「…少しでいい、洗いたいのだが」

「我慢してください」

「…頼む」

「我慢してください」

「…ほんの少しでいい」

「我慢してください」

……こいつ、ちっ、仕方ない
明日、トリートメントをすれば大丈夫か？
髪が傷んでいる所はなさそうだが、念には念をした方がいいだろう

「私の名前を名乗ってませんでしたね
私はカーム、ガスタの静寂です
あなたはルアさんですよね？」

「…あぁ、合っている」

「それではルアさん、あなたは何故このような傷を負っていたのですか？」

はぁ、医者かこいつ？
ここは病院っぽいからな
そこでいるという事は、医者かナースくらいだろうな
はぁ、なんと報告したものか……

「…ただの傷だ」

「ただの傷でこんなにひどくなるわけないでしょ」

くっ、ノロマそうなくせに……

「…はぁ、ただ槍が腹に入って、抜けただけだ」

「どうして、槍が？」

「…戦いに巻き込まれたからな」

「相手は誰だったのですか？」

……はぁ、ドラグニティと答えてもダメだし
ゲイボルクとも答えたらダメだし

「…さぁ、知らないな、相手が名乗らなかったからな」

「そうですか」

「…いつここから出られる？
早く出たいのだが」

「ここから出るには傷が完治するまで許しません
後3日くらいで大丈夫でしょう」

「…長い、もっと短くできないのか
ただの傷だぞ」

「これでも結構短くしています
あなたの傷はとても深いので、普通ならもっと時間がかかるのですよ
ですが、この薬草がよく効いているせいか、効き目が出ているのです
なので、この調子でいくと3日なのです」

そういい、いかにも薬草と分かるような草を見せてきた
くっ、こっちには後、風の塔と闇の塔が残っているというのにな
風の塔にはウィンダールに聞くとして

闇の塔は闇の国にあるから、できるだけ昼間に行きたい
闇に潜んでいる者が多そうだからな

「では、消灯の時間なので電気を消しますよ
おやすみなさい」

はぁ、カームは出て行ったが、どうするか
このままじゃ余裕が余りない
抜け出すか
明日の早朝にベビーたちと合流しないとな
じゃ、早いめに寝るか

……
……
……

くっ、逃げ出そうと思っていたのにな
カームめ、朝早く着やがって
その後に例の薬草を切り刻んで作った塗り薬をつけられた
傷は早く治って欲しいが、あれは傷口をえぐるような痛みだ
本当にあれで治るのか？むしろ、ひどくなっていっているような気
がするが……

「元気そうだな
寝ていると思っていたのだが、話ができそうで良かった」

「…ウィンダールか
風の塔はどこにある」

「まぁそれはおいておこう
今話したら逃げ出すかも知れないからな
ここは安全だから安心するがよい
連れの者は後で来るだろう」

ちっ、見破られたか
ガスタ以外には知ってそうな奴はドラグニティしか知らない
しかもそいつらは龍使いとは仲が悪そうだから教えないだろうな
はぁ、暇だし話を何かしておくか

「…リチュアと何の打ち合わせをしていたんだ」

「それは……まぁいいだろう
ヴァニティも別に言ってもいいと思うからな
リチュアとは資源の取引の打ち合わせをしていただけだ
我々ガスタはこの森でとれる資源を出し
リチュアは近くの海で取れる資源との交換をな
リチュアは時々だが、超古深海王シーラカンスを出してくれるのだ
それは意外と珍味なんだ、私の娘が気に入っているほどな」

なるほどな、ここは余り魚を捕れなさそうだ
で、リチュアは魚以外はとれなさそうだからな
それで取引が成立しているのか
そうじゃなかったらかつてが敵だった奴らがこんなに仲良さげになるわけがない
で、こいつは父親なのか
娘がいると言っていたからな

じゃ、カームはそいつの母親か姉妹なのか？それか関係ない奴か
年齢を聞くと分かると思うが
『女性に年齢とスリーサイズを聞くと酷い目に会う』
というのが親父の口癖だったから、聞くのは止めておこう
聞く気はないが、こんな状態で酷い目に会えば余計に退院できなくなる

「…世間話の方は何を話していたんだ？」

「それはな、ヴァニティが私の娘よりエリアルの方が可愛いと言うんだ
それで、私がウィンダのいいところを言うと
ヴァニティも負けずに言ってきたんだ
それが原因となりデュエルをし
1勝1敗となり三試合目をする時に君が部屋に入って来たんだ
私達の私情で君を待たせるのは悪いだろ
だから結果は次、話をする時に持ち越したわけだ」

ウィンダというのはこいつの娘でいいのだよな
で、こいつら何やっているんだ
こいつ親バカか？
ヴァニティはエリアルの兄的な存在か？いや兄か？むしろ父親だったりしてな

「まぁ、君は私の娘を見た事ないからどっちが可愛いか分からないと思うが
見たらウィンダの方が可愛いと思うはずだ
ウィンダはな時々不器用な時があるがそれが可愛くてな
それから……」

こいつ絶対に親バカだ
娘の事語りだすからな、まだ語っているし
これに対抗するヴァニティもヴァニティだ……
はぁ、やっぱり俺の知り合いは変な奴しかいないな

「それにな、ダイガスタの称号を幼い時にとったのだ
その記録はまだ超えられてないしな
ウィンダの次はムストの娘のカムイだったか
まぁ、ムストがカムイの自慢をしてくるが、ウィンダの敵じゃないな
他には……」

まだ語るのかよ
親バカを超えて変態かストーカーのレベルになっているぞ
ムストっていう奴が出てきたし
そいつも親バカなのか
ガスタは親バカしかいないのか……
ちゃんとしているのまだカームしか見てないぞ

「という訳だ
まぁ、少ないがこの辺で止めておこう
まだ見ていないんだ、先に楽しみを全て言ってしまったらつまらないだろ」

これで少ないのか……
別に気があるわけでないから楽しみじゃないが

「…そうか
ガスタはすごい奴が多いというのが分かった（親バカ的な意味で）」

「ははっ、そうだろ

1番は私だが（力や技術的な意味で）」

「あぁ、飛び抜けて1番だろうな（親バカ的な意味で）」

「ははは っ、そんなに褒めなくていい
私はそろそろ行く、ゆっくりと寝ているがいい
連れの者は後で来ると言っていたからその時に起こされると思うからな
今のうちに体を休める方がいい」

バカにしたのだが、なんだか機嫌良さげに出て行ったな
絶対に子離れできないだろうな
はぁ、ウィンダールが言った通りになりそうだから寝ておくか

「…カーム、寝るから電気を消してくれないか」

「はい、分かりました」

そう言って消した
カームはウィンダールを見て、いつもの事のように呆れていたからな
やっぱりこいつがガスタで1番の常識人じゃないのか？
はぁ、こいつが母親か他人だったらいいが、姉妹だったら苦だった
だろうなアレ
まぁいいか、他人の家庭の事に口を挟むのは面倒だ
そういえば、俺の家どうなっているのか？
ダルクとアウスがいるから大丈夫だと思うが……はぁ、大丈夫だっ
たらいいが……
もう寝るか

……
……
……

ん？ここはどこだ？
山？いや海？空？結局どこだ？
はぁ、顔を動かすと景色がガラリと変わるのだが……
なんかの魔術にかかったのか？
はぁ、考えていても仕方ないか……

前…空から何か来たな……見覚えがあるが何だあれ？
白いドラゴンにまたがった白い戦士？槍を片手に持って投げた！？
その程度か、かわせるな……ちっ、体が動かない、何故？
くっ、腹に刺さったか……で抜け出して、その戦士のもとに戻る
これ前にもなかったか？

はぁ、横に行ったか……顔で追ったら景色が変わりいなくなったか
ここは氷で覆われた所か……三体の龍が出てきたか
これらの龍、見覚えがあるが……何だ？さっきの奴同様に思い出せない……
全員で一斉攻撃か、氷弾に、冷気のブレスに、ブリザードか……
はぁ、顔を動かせば避けられるか？

うまくいったみたいだ
ここは山か……はぁ、ここは思い出せるな、俺の山か……
アンデットが来たか、数が数えきれないほどいるし……
くっ、さらに何か来たな……６人の魔術師か

ちっ、赤い奴が炎の魔術を使ってきたか
アンデットで手が空いてないというのに、６人の魔術師の相手などできるか

下をとっさに向いたのが正解だったか
！？ここはダメだ
顔をすぐに動かさないと……動かないだと！？
あの光景をまた見る事になるのかよ……

ポニーテールの少年が慌てて大学から出て行った
その後ろから銀髪の長毛の少年も出て行った
彼らが向かっている先は、銀髪の少年の家
その家が大学から確認できるほど近くにある
その都市…魔法都市ーエンディミオンのそばの山にあるからだ
その家が今、大量の魔術師が囲っている
少年らは彼ら、魔術師に見つからずに家の裏口から入って行く
そこには、体格の大きい男性が少年らを待っていたかのように静かに迎えた
そして、こう言った

「お前ら、ここから逃げろ
ここは俺が引き付ける
この地図に書いてある場所はあいつらが来れない場所にある
リツ、お前はそこに入るな、出られないようになるからな
じゃ、気をつけろ」

そういうと、ドアに手をかけ出ていこうとしたが、止めた

「親父も一緒に行くぞ
あいつらに見つからない抜け道がある
あいつらごときには無理だ、だから」
と、銀髪の少年が引き止めたからだ
それに続けて、ポニーテールの少年が
「師匠、外にいる魔術師は皆何かを待っているようだよ
師匠が出てくるのを待っているか、司令塔が来るのを待っているのだと思う
だけど、準備はもう終わっているそうだから、出て行ったら危ないよ！！」
彼らの言葉に男性は
「お前ら、あいつらがこの家を囲っている結界を完成させる前に逃げろ
今ならまだ間に会う
俺は体がでかいからな抜け出せない
お前らまでがここで死ぬ事はないんだ
だから俺の事をほっておいて逃げろ」
そういい、少年らの反論を聞こうとせずに出て行った
外に出ていき、そばにいる使い魔に話かけた
「お前にはいつも世話になっているな
俺が子供の時、旧国でお前を使い魔にした時からの付き合いだからな
礼を言い切れないな
こんな俺を信じ、その部族の王を止め、俺の使い魔になり
今、俺と死のうとしているからな

だがレヴァテイン、最後くらいは自分の好きなようにしていいのだぞ
俺の息子と弟子を逃がすために死ななくてもいいのだからな
ここからはお前の好きなようにすればいい」

男性の使い魔…レヴァテインは彼の言った意味をしっかり理解した
『お前はここで死なずにかつての仲間の所に戻れ』と
だが、レヴァテインはそれをせず、彼と共に戦場に出て行った

それを見た少年らは

「リツ、俺たちも行くぞ
あいつら何者か知らないが、親父を殺そうとしてんだ
俺だって何か手伝えるはずだ
６種類の霊術をある程度覚えたからな」

「ルア、師匠が言った意味をちゃんと理解しないと
師匠は『お前らは生き残れ、これが間違いだといつか証明しろ』
って伝えたかったのだと思う
だから、それを忘れないようにして、今は逃げないと」

このように、幼いながらも自分のするべき事をしようと意見を言っている
銀髪の少年は共に戦おうと、ポニーテールの少年は逃げようと
銀髪の少年はポニーテールの少年の意見を聞き入れた
理由は、目の前の戦いが自分の手を出せないほど凄まじかったからだ
男性は使い魔を自身に憑依させて魔術師を大量に殺し
魔術師は、男性を倒そうと大魔術を発動させようとしている
誰が見ても足手まといにしかならない
その事を感じてしまったのもある
少年らは戦場を見える、完成つつある結界の外に出た

もちろん、身の安全も確保してある
少年らはその場所であの戦いを見て、何を思っていたのだろうか
悲しみ？怒り？哀れ？それとも喜び？
それは少年らにしか分からないが、恐らく悲しみであろう

男性はその少年らの姿を見て安心したのか、術のために使う魔力をためだした
今までしなかったのは、少年らが安全な場所に行くまでであろう
だが、横眼で安全な場所に逃げている少年らを見てそれをしたのだろう

彼の使い魔は今、憑依状態を解除していて、違う場所で戦っている
かつて、ある部族の王なだけあって魔術師との力の差は歴然としている
もちろん、レヴァテインが圧倒的に倒している
そのレヴァテインが魔力をためだした男性を見て
一瞬悲しげな目をしたが止め、敵を倒しに行った

レヴァテインと同じく、少年らも感じたようで
目からは涙がこぼれ落ちていた
大人でさえこの状況を見れば泣くどころでない
少年らはまだ５歳だ、それで正常でいられるはずがない、当然であろう

男性の方は術の準備が完成したようだ
そして、術を使った

「術式４２番－ブラック・ホール！！」

そういい、術ができた

男性の近くに黒い穴が開いた
それは、全てを吸い込もうとした
森や家、魔術師も
男性も例外じゃない
少年らはその範囲に入ってないので吸い込まれる危険性はない
範囲内にある全てのものを吸い込むのは時間の問題だ
そうだったが、結界が完成してしまった
その結界は、その中のあるものの行動範囲を狭める目的で作られたもの
ブラック・ホールはその中で発動したまま
男性もその中、多くの魔術師は結界がある事を知っているので、その中に入ってない
中には、ブラック・ホールと男性とレヴァテインと家などの物だけとなった
結界内はだんだん黒くなっていく
魔術師たちはそれを見て目的が達成したのだろう
全員が立ち去った
数分後、ブラック・ホールは止まり、結界内が見れるようになったが中には何も無かった
少年らはそれを見てさらに悲しんだが
男性は必ず帰ってくると信じ互いに行く所に行った
ポニーテールの少年は父親と妹が待つ家に
銀髪の少年は男性に言われた場所に

そこは自分の家があったのと同じような山に着いた
家を探そうと山を歩いたが見つからなかった
地図をもう一度見て、その場所に行ったが見つからなかった
少年が野宿の準備をしていると
地面から子供のドラゴンが現れた
地面の中にある家から出てきたのだ

その子供のドラゴンは銀髪の少年の使い魔
男性に連れられて先に来ていたそうだ
銀髪の少年は自身の使い魔に会い安心したのかその場で寝てしまった
銀髪の少年はその日からそこで暮らすようになった

ポニーテールの少年は数年後、闇霊使いの継承の儀式を受ける事となった
同じ時、場所で光霊使いの継承の儀式を受ける事となった妹がいた
その時に2人ともがその場で消えた

その時と同じ時に銀髪の少年が住む山にアンデットが出現しだした
何のために出てきたのか分からない
だが、自分の山に出てきたから銀髪の少年はそれを倒すために戦った
自分は生きる場所を奪われないように戦うが
同時に死んだら男性やポニーテールの少年に会えるのじゃないかとも思っている
だれもそんな彼を救えはしない

……
……
……

「お兄ちゃん、大丈夫？
結構うなされていたけど」

目が覚めると破術師が心配そうに言ってきた

そばにいるベビーとモノロフも見てきた
何か変な夢を見ていた気がするが、思い出せないな
何を見たのだったのだろうか
まぁいい、どうせつまらない夢だろう

「さぁな」

「体大丈夫？
いきなり倒れたからびっくりしたんだよ」

「そうか
次からは気を付ける
悪かった」

「そう、お兄ちゃんが退院するまで、ここに居ていいらしいから
ベビーとモノロフと一緒に待っているね」

ベビーとモノロフも同意するように頷いた
はぁ、僕のせいでこんな事になってしまったな
こいつらにはなんか悪いな

「まだ顔色すぐれないようだから
ボクたち部屋に戻っているね」

「そうか、じゃな
もう一寝入りでもするか
…カーム、すまないが、また電気を消してくれないか」

そういうと、ベビーらは『おやすみ』と
カームは電気を消して出て行った

はぁ、寝るか

第9話（後書き）

ルアが破術師の目的を手伝っているのは
破術師が仲間を探しているからです
ルアは家族がいないから、1人の孤独さを知っているからかもしれませんね
まぁ、その孤独さを消すためにベビーらを弟にしています

ドラグニティが龍使いを嫌っている理由は
ルアの父親がレヴァテインを使い魔としたからです
自分たちの王をとられたと思ったのでしょう

ゲイボルグはカッコイイキャラにして、ルアのライバル的な存在にしようとしたのに
何故こんな奴に……

ルアは邪道キャラのつもりだったのですが
なんだか違う……

番外編　その１（前書き）

番外編　その１です
ルアの家にいる霊使いの話です

番外編　その1

1日目

視点ダルク

ルアが出ていったけど、どうしようか
問題児が2人いるからね

朝は僕とライナが1番早く起きたけど
他のみんなが起きたのは昼だからね
寝すぎだよ！！

昼ごはんは僕とライナで全員分を用意する
本当に1週間くらいの食糧あったよ……
まぁ、普通の和食だから簡単にできたよ
ちょっと手を込んでみたかったけど、ヒータに急かされたからできなかった
でも食べられる程度にはできているはずだよ……多分

昼ごはん後、エリアとヒータとのデュエル
理由は、おやつのクッキーが最後1つだけとなって
それをどっちが食べるかでさ
はぁ、半分にすればいいのに……
勝者はエリアだったよ
決め手はスライムトークンに下克上の首飾りを付けて
フィールド魔法、湿地草原を発動し、暴走トークンなどの強化カードを発動させた事らしいよ
スライムトークンの攻撃力が……常識以上の攻撃力となったらしいよ

はぁ、それとあまり戦いたくないね

晩ごはんはアウスとヒータが用意する
アウスはあまりパッとしない料理を作って
ヒータは熱そうな料理ばっかり
コンロで赤ワインを入れたのか知らないけど、火が上がっていたね
僕たち未成年だよ！！
まぁ、アルコールは抜けるからいいとしよう
ワインがあるルアの家って……

風呂は、僕を除く5人が入り
僕は皆が上がったら入る
はぁ、こんなに広い風呂に1人で入るなんて……

で、寝るはずが……
他の5人がデュエル大会をするとかで起こされた
結果は、ウィンのスターダスト・ミラージュ！！グォレンダァ！！
を全ての試合でして優勝
ｖｓ僕の時が優勝戦だったよ
後1ターンあれば、終焉のカウントダウンの効果で僕の勝ちだった
のにね
その後は大会の後の打ち上げをした
超融合のＤＶＤを見て笑ったり（おもにパラドックスの顔芸）
お酒のつまみを食べたり……
寝ろよ！！

で結局寝たのは、４時を超えていたのじゃないかな
こんなのだから昼に起きてしまうのだよ……
まぁ、僕とライナはいつも通りに目が覚めたから起きたけど
頭がズキズキする……

2日目

視点　ダルク

……はぁ、昨日と同じ暮らしだよ
デュエル大会をして打ち上げをして……
寝ろよ！！！！

3日目

視点　ダルク

今日はいつもと違った
デュエル大会がヴァンガード大会に変わったからね
……これは僕ら的にしていいの？
はぁ、しちゃったから仕方ないね……
まぁ、結果的にヒータのかげろう軍団に全員負けたね
『ファイナルターン！！』等を高らかに叫んでいたね
もしかして酔ってなかったよね
赤ワイン飲んでないよね……はぁ、不安になってきた
ルア早く帰って来てくれ！！

番外編　その1（後書き）

やっぱりダルクが1番苦労人になる……
そういえばライナって1話目に話していらい話してない……

キャラ設定２（前書き）

キャラ設定その２です
霊使いの設定です
それともう１人の設定です
まぁ、モブキャラは書きませんが……

キャラ設定2

風霊使いウィン

天然

水霊使いエリア

若干ツンデレ？

霊使いの中では常識人の1人だと思われたが、同性愛者だと疑惑が……

火霊使いヒータ

ムードメーカー的な存在

地霊使いアウス

空気キャラその1になった……

霊使いで1番頭がいい、だてにメガネをかけてない

常識人の一人

闇霊使いダルク

黒一点

霊使いで1番常識人&苦労人

常識人だけど、重度のシスコン

光霊使いライナ

空気キャラその２
天然系、重度のブラコン

氷結界の破術師

性別は女　『英語版から推測するに男だ』という説があるが、この作品では女とします

年齢１１歳

水の国でルアにあってから共に行動している
ボクっ子
ルアの事を『お兄ちゃん』と呼んでいる

番外編　その２（前書き）

最近までこれの存在忘れていた……
まぁ、いろいろあったから覚えていても書けなかった……

明後日が夏休みの宿題の提出日なのに何やっているんだろう……
しかも、宿題１つも手を付けてない……
大丈夫かな？

後、この話メチャクチャですから見たい人だけお願いします！！
どんな内容でも『俺は見てやんよ！！』精神の人のみお願いします
！！

このくらい空けていれば大丈夫ですかね？
では「俺は見てやんよ」精神の持ち主の方、どうぞ！！

番外編　その2

竜の渓谷には伝説の騎士団が住むと言われている
伝説の騎士団は名をドラグニティを言う
彼らは旧国の危機を感じると現れる
だが、彼らをあの戦争が始まるまで誰も見た者はいなかった
何故なら、彼らが住む竜の渓谷にはたどり着けるのは並の人間には
無理だからだ
いや、人外レベルの人間にも無理だろう
そこにある少年がやってきた

「お主、何者だ？
ここに用か？」

その少年にドラグニティの王…レヴァテインが話かけて来た

「俺は龍使いだ
使い魔となる者を探しにここに来た」

「ほぉ、龍使いとは
たしか新国の役職か……
新国からよく来よる
そなたは使い魔を探しに来たと言ったな
何か当てはあるのか？」

「あぁ、今考えているのは水の国にある氷結界の龍をな
あいつらの中から誰をするか……いっその事全員にするか」

少年がそう言った途端、レヴァテインの表情が強張った

まぁ、当然だろう
氷結界の龍と言えば、氷結界の一族が封印しえざる負えない三龍だ
それをこの少年は使い魔にするという
しかも3体共……
3体が目覚めると世界が終わると言われている
それはこの少年ももちろん知っているはずだ

「奴らが全員目覚めるとどうなるか分かっているのか！！
この世界が終わると言われているのだぞ！！」

「冗談だ、俺だってあいつらを使い魔にできると思ってないさ
その前に氷結界の連中に止められる
だからここに来たわけだ、ドラグニティにな」

「そうか……最近の子供は恐ろしい冗談を言うのぉ
ここで立ち話をするのもよいが、中に入がよい
ワシの家で話そう」

といいレヴァテインは少年を中に促す
言い忘れていたが、彼らは今、竜の渓谷の入り口の前にいる
まだドラグニティの村に入っていない

レヴァテインの家に彼らはついた
流石はドラグニティの王、周りの家より立派である

「さぁ、お主はドラグニティの誰を目星をつけているのだ？」

「そんなのは知らない
俺はドラグニティという名しか知らないからな
ただ、ドラゴンがいると聞き来ただけだ

誰がいるかは全く知らない」

「そうか……
ならワシが一人ずつ教えて行こう」

「助かるが、なぜ俺の手伝いをしてくれる？
お前からすれば仲間をとられるような話だろ」

少年が疑問に思ったことを言った
それもそうだろう、王が村の者をさっき知り合った者に渡すというのだ

「ここで使い魔をつけないと封印龍と契約しそうじゃからな……」

「いやいや、あれは冗談だから」

「まぁ、ワシも冗談だ
ただドラグニティは…いやワシが困った奴や頼られたりされると手伝いたいだけだ
流石に限界があるがのぉ
だが、今回のお主の願いは限界じゃない
だから手伝ってやるのじゃ
それに仲間の一人がこの村から違うところに行く機会が生まれるのだ
さみしいが、それがお主には上手くいきそうなのでな少し楽しみなのじゃ

今、写真つきの名簿を持ってくる少し待っていてくれの」

といいレヴァテインは名簿をとりに行くために席を離れた
その後１０分くらいして戻ってきた

「ほれ、白い龍はどうだ？
こいつは自分が気に入った者としか契約しないと言っているからな
今までこいつとナイトの契約しようとした者がいるが全員が断られているんじゃ
はぁ、働かないのならさっさと出て行ってもらいたいものじゃ……
村1番の龍なのだがのぉ」

「こいつはなんか気に入らない、てかニートとほぼ変わらないじゃねーか
他のを見せてくれ」

「そうかのぉ、ならアキュリスはどうだ？
小さい体だが、結構やりよるやつじゃぞ」

「いや、そいつも気に入らないな
俺のように強い使い魔はいないのか」

「使い魔が自分の力量に収まらなかったら、お主の体が崩壊するのじゃよ
それを考えているのかのぉ？」

そう、レヴァテインが言う通りに使い魔が自分より強すぎると崩壊してしまう
だから他の龍使いを含む霊使いは自分より力の無い使い魔と契約するだが、この少年はそのギリギリ力に収まりそうな白い龍を断り、アキュリスを断ったうえにそれを言った
レヴァテインが心配するのも当然だろう

「大丈夫だ、俺は結構強いからな

まぁ、崩壊した時はその時だ、後悔はしないさ」

「ぬ、そうか
ならミスティルはどうだ？
ワシの次に強いアームズだ」

「なんだか、顔がムカつく
こいつ後でぶん殴ってきていいか？」

「理不尽じゃのぉ
それから顔を殴るのは止めてやってくれ」

「そうか、他は誰がいる？」

と全ての者を見せたが少年が気に入る者はいなかった
少年の理想の使い魔のレベルが高すぎたのであろう
だが、少年はドラグニティに来た時から目を付けていた者がいた
その者が少年の理想の使い魔にヒットしていたからだ
それは……

「他にはいないのか？」

「これ以上は龍がいないのじゃ
数が増えて欲しければＫＯ○ＡＭＩと交渉するのじゃ」

「いやいや、そんな事ＫＯＭ○ＭＩが関わってくれるはずがないから
それにそんな大人の事情を言うな！！
これを見てくれている人が『はぁ！？何言っているのこいつ』と思
うから！！」

「そうか、メタるのは止めるとするかのぉ」

「あぁ、止めてくれ
これを見てくれている皆様、すみませんでした！！」

「そんな謝らなくても」

「お前が原因だから！！
はぁ、決めた、お前は今から俺の使い魔だ！！」

「……はぁ！？
ワシここの王をしちゃていたりするのじゃが！！
まぁ、最近だるいと思ってきたから別に王はどうでもいいかのぉ
はぁ、仕方ないのぉ、契約するぞ」

「……いいのか？」

「作者がこれ以上書くとなんだかダルくなって来たようだからのぉ
本当はこれを書かずに違う話を書こうとしていたが
ふとワシらの事を思い出し『こいつらの話を書いた方がよくね？』
的な事を思ってな
で書いていたが、さっき言ったようにダルくなったから端折るらし
いのじゃ」

「だ・か・ら・メ・タ・る・な！！
早く契約するぞ！！作者がこれ以上変な事書く前に！！」

こうしてある少年とレヴァテインとの契約が成立したのだった
めでたし、めでたし

「めでたしじゃねーし！！
絶対これ見た読者の皆様、後悔しているから！！
それからいつも以上にひどい出来だから！！
いつもは、よく分からない中二病くさいアホっぽいがまだ比較的、
多少なりともましだが
これは絶対にクソ酷いから！！」

めでたし、めでたし

番外編　その２（後書き）

はい、ある少年が言う通りに酷い出来です
本当にすみませんでした！！

言い訳をするとなんだレヴァテインの口調難しいな
でも書き直すの面倒臭いな
じゃもうテキトーでいいや！！的な……ダメか
次回は頑張ります！！

第１０話（前書き）

久々の更新＆本編です
それから、ルアの一人称を『僕』から『俺』に変えました
他の話も順に変えて行きます
はぁ、ついリツのくせで『僕』にしちゃったのですよね
書き換えるの面倒だったのでそのままにしていたのですが、やっぱり変えます
色々すみません

第１０話

視点　ルア

はぁ、朝か……
これでガスタで2日を使ってしまったのか
明後日にアンデットが現れるのにな
俺が寝ているベッドの横に、俺の服（着替え用）と鞄（中に着替える前の服がある）がある
それを来て出て行って、ベビー達を迎えに行き出て行けばいいが……

「ルアさん、おはようございます
良く寝れましたか？薬を塗りますね」

カーム（こいつ）がいるから無理だ
はぁ、いつも抜け出そうとするときに来る
変な能力があるのか？
それと……

「…ぐっ、前にも聞いたかもしれないが聞く
それ本当に薬か？毒じゃないよな」

本当にこれ、傷をえぐるような痛みが来るのだが
薬ってこんなに痛みがあるのだったか？

「えぇ、薬ですよ」

笑顔で返された……
はぁ、親父が言うのは本当だ、女は悪魔みたいな奴だ

「カーム！！ルア！！いるか！！
今すぐ避難しろ！！インヴェルズが攻めてきやがった！！
ルア！！お前の連れは避難させたから安心しろ！！だからお前も早く避難するぞ！！
それと今外に変な風が吹いている！！
それは体調を崩すから余り当たらないようにしろ！！
それで何人かが今戦闘不能になっている！！」

はぁ、ウィンダール（親バカ）がバカみたいにあわてて入って来たで、避難？インヴェルズ？
インヴェルズは確かあのガキが言っていたか
５つの部族に侵攻した部族だったか？
で、倒されたのだったか？
まぁ、倒されたのじゃなくてもいいか
はぁ、無駄な争い事は嫌いだが、借りを作るのはもっと嫌いだ

「…お前らは先に行っていてくれ
俺は後で行く、着替えたいのでな
場所を教えてくれ」

こいつらに俺が今からする事を言うと面倒が起きそうだ
だから、見られたくないな

「何を言っている！！
一刻も争うのだぞ！！だから早く来い！！」

「…一刻も争うのならば、早く戦場に出ればいい
俺に構ってい暇はないだろ
ガスタの賢者ならば早く行け」

「くっ、カーム行くぞ！！
ルア、ここを出て左に大きい建物が見える、そこが避難場所だ！！
早く行けよ！！」

2人共出て行ったか
じゃ、着替えるか

そろそろ行くとしようか
ベビーもちょうど来たしな
まぁ、長年の付き合いだ、これから俺が何をするか気づいて来てくれたのだろう

「ベビーどうした？疲れているのか？」

ベビーが来てくれたのはいいが、体調が優れなそうだ
ベビー自身は否定しているが、もしかしてウィンダールが言っていた『風』のせいか？

「ベビー、避難所に帰れるか？
帰れないのならここに残り……はぁ、仕方ない行くぞ」

こいつ頑固だからな
俺が言っても言う事聞かないからな、こういう時
とりあえず、『風』を止めるか

……
……

……

インヴェルズと言うのは虫けらだったのか
どこにもわいて、侵略しようとするあいつらにはお似合いの姿だ
だが、先にする事があるからな、あいつらの相手は後だ
まぁ、あいつらは空を飛んでいるから結局今は無理だ

「ベビーたのむ
龍術ースタンピング・クラッシュ」

術は発動させた、後はベビーが『風』を消すだけだ
サイクロンでも良かったが、周りを巻きこんだら面倒だからこっちにしたが
これにして良かったな、周りを全く巻き込まずに『風』を消せた
結局あれはなんだった？あの虫けらどもが作ったのか？まぁいいか
ベビーの体調も元通りになったしな

「ベビー、憑依装着
あの虫けらどもがいる高さまで飛んでくれ」

俺を魔力をベビーに憑依させ巨大化させる
で、やっとあいつらと戦えるな
せっかくここに足を運んでもらったんだ
客人にはそれ相応の物を送らないとな
これはガスタの仕事かもしれないが、今は俺しかいないから俺がしてもいいよな

「…褒美だ受け取れ、そして……

儚く散れ
ギャラドボルグ？」

数が一気に減ったな
半分以下じゃないか？
弓は余り使いたくないのが、最近よく使うな……
まぁ、そんな事考えながらアームズ・ホールを展開したが、何を出すか
槍でいいか
でもな、この槍結構気に入っているのだよな、あいつらに使うのにはもったいないか？
まぁ、使わないのももったいないか

「…さぁ、悲劇の始まりだ
俺がここにいた時に攻めたのが間違いだったな」

なんだか、あいつらバカみたいにこっちに攻撃してきたな
Aがはいた溶解液っぽいのもがBに当たり
Bがはいたブレスが Aに当たりみたいな感じで、潰しあいになっている
だが、周りにいると邪魔だ

「…惨めに消えろ、虫けら」

と言い、槍を振り回すと、面白いように当たる当たる
そして落ちて行ったぞ、こいつら本当に5つの部族に挑んだのか？
弱すぎないか？まだ、ゲイボルグの方がましだったぞ
インヴェルズの残党が集まって侵略して来たのか？
数が少ないしな
だが、それをまとめるリーダーはどこだ？

リーダーなら今はこんな近くまで来ないな
そんな事より、ガスタはまだか？来ないのなら
別に、アレら全て倒してしまっても構わんのだろう？

「…いい加減にウザい
虫けらは虫けららしく俺にやられろ」

いい加減に面倒になってきたな
２本目の槍を出すか

「…最後の１体
これで、近くに来た虫けら全て倒したが
後は離れたところにいる虫けらだけか
はぁ、こっちに少し近づいてきたし……」

数は２００前後か？
はぁ、残党のくせによくわいてくるな

「うわー、私が見た時よりも少なくなっている！！
あなた１人で倒したの？すごいね！」

……エリアルはエリア似で
こいつはウィン似か……
はぁ、他人の空似の奴をここ最近に２人も見るなんてな……

「…そんな無駄口たたいている暇があるなら手伝え
お前が乗っている鳥はやる気だが」

「はいはい、やりますよーだ！！
ガスドス！！やるよ！！」

と言って、ガルドスが突っ込んで行ったが大丈夫か？
返り討ちにあうなよ
……そんなのは杞憂だったようだ、クチバシで攻撃して
上に乗っているウィン似の奴が杖から出した波動で蹴散らしている

「ルア！こんな所で何をやっているんだ！！
さっさと非難しろっとさっき言っただろ！！

ウィンダ！！その調子だもっとやれ！！」

はぁ、親バカが来たか、こいつも鳥に乗っているな
あいつはウィンダと言う名前か…あいつの娘だったか？

「…お前の娘よくやるな」

お世辞じゃなく、本当によくやるな
あいつの周りの虫けらはすぐに倒されて落ちていくし

「ははは、そうだろ！！そうだろ！！
何だって私の娘だからな！！」

……すぐに機嫌がよくなったな、こいつ
ウィンダをほめると機嫌がよくなるのか……こいつは利用できるな

「…話している暇はもうなくなったようだ
俺は先に行く、お前はウィンダの所にでも行き手伝えばいいのじゃ
ないか？」

さて、虫けらには消えて貰わないとな

それよりもリーダーはどこだ？
飛び抜けて力が大きい奴は１人もいない
１番強い奴は赤色の虫けらか……だが数が１番多いから違うな
ここにはいないのか？違う場所でこの状態を観察しているとかか？
まぁ、どっちにしても虫けらを消すか

「よぉルア！！久しぶりだな！！」

「同じく久しいね、ルア」

……何故こいつらがここにいる？
水の国で別れたよな

「…おい、リチュアがどうしてここにいる？
それともお前らだけか？アビスとヴァニティ」

「いや、ガスタがインヴェルズに襲われたと聞き助太刀に来ただけだよ」

「それとな！！俺らだけじゃなく、リチュア全員がここにきているぜ！！」

……ガスタのリチュアの共同戦線か
はぁ、なんだかすごい事になって来たな……

「…俺の邪魔だけはするなよ」

「おいおい、兄ちゃん！！それは俺らもか？」

「あれスフィア？この人と知り合いなの？」

……はぁ、聞き覚えのある声がしたと思えば、奴か
何故ここにいる……その前に何故そんな所に顔がついている？
で、お前を胸につけているこいつは誰だ？
はぁ、どうしてこう色々わいてくる？

「兄ちゃん！俺がこんな所についているのか疑問に思っただろ！
それは俺もだ……何故こいつの装備になった時こうなるんだ？
胸ほとんど無いくせに」

最後の言葉を言った時、こいつを装備している奴がこいつをすぐさま殴った
いい耳しているな……あんなに小さい声で言ったのにな

「…ヴァイロンも今協力しているのか？」

「いやいや、俺はヴァイロンを今離れてな、ガスタにいる
まぁ、昨日ガスタに来てなかったら、宿を営業していたけどな！！
まぁ、俺と同じような奴が3人いるが、内の1体がテトラでリチュアにいるぞ！！
ほら、あそこで」

……あそことはどこか分からなかったが
ものすごい音がしたから、その方向を見たら怪物が変な機械を装備して水の塊を発射していた
恐らくあの機械がテトラなのだろう……
あの怪物はなんだ？

「…ある程度分かったお前らはここで戦ってくれ
俺はもっと奥に行く」

「そうか！！じゃな兄ちゃん！！後でな！！
俺は仕方ないがこいつの小さい胸の所でいて置くな！！」

「ルア！！情けなく負けるなよ！！」

アビスが不吉な事を言ったが、気のせいだろう
それとオーナーにまた災難が訪れそうだと思うな
奥は森か
あの森ならばこの状態を確認でき
そして、あの場所には虫けらどもがいない
それを俺たちがあそこは何もないと思わせやすいだから奇襲もできるな
横目で見たが、虫けらが俺の元にあわてて行こうとしたが
ガスタやリチュアに止められている、あわてるという事は何かあるのだろう
俺の予想が外れてない限り、リーダーがいる
それか、リーダーに連絡をする奴か
連絡要員だったとしてもそいつを潰せば、リーダーに連絡ができなくなる
で、リーダーが今戦場にいる虫けらどもに連絡ができなくなる
どっちにしても倒さないとな

「さぁ、どっちだ？」

第１０話（後書き）

中途半端ですけど、今回はここまでです
このインヴェルズのリーダーは誰でしょうね？

『風』は『猛毒の風』の事です
それはインヴェルズが発動したのかは分からないようにしています

スフィア……口は災いの元っていうのを理解しましょう

それと憑依装着の設定です
使い魔に自身の魔力を憑依し、憑依を解除する時
憑依した分の魔力が残っていれば返して貰えます
憑依中に魔力が少なくなれば
使い魔とマスターの見えない回線を通じ
マスターが使い魔に魔力を渡さなければなります
渡さなければ、憑依装着が強制的に解除になります

第１１話（前書き）

学校が忙しくなって来たので更新スピードがおくれます
それと、今回は少な目です

第１１話

視点　ルア

森の奥まで入って来たが、気配が全くない
それが逆に怪しいな
憑依装着を解除しておくか

偵察部隊やリーダーどっちでもいいから出て来い
はぁ、向こうは激しくなってきたな
爆発音が多い……爆発音？何を爆発しているのやら
その前に『激しく』なって来ただと！？
新たな部隊を突入させた、又はリーダーが表舞台に出て行ったのか？
くっ、それなら残った方が良かったか？
はぁ、戻るか……くっ、デカイ虫けらが出てきやがった
やはり、向こうに俺を戻したくないのだろうな

「どこの者かわからんが、我らインヴェルズの同胞を手にかけやがったな
グレズ様がこの前、オメガにより倒された事により戦力が減り、貴様が放った矢で更に減った
その代償、このホーンが払ってやる
あの方が出る出番はこの戦いではない、俺が全て侵略してやる」

あの方？今のリーダーか？
まぁ、こいつがそういっているからこいつよりも強い奴だろう
向こうの戦いではこいつが言う通りならリーダーは行っていないな

「…お前の仲間がどうなろうと俺には関係ない

それに俺の邪魔をするなら破壊するまでだ、どんなものでもな」
「なら話は早い、俺がお前を倒せばいいのだからな！！」
ふーん、こいつさっきまでの奴より強いな
「…はぁ、さっきのお前が言った事は間違っている
俺がお前を倒すのだからな
火霊術ーデス・メテオ」
俺が放った炎が奴を囲って、大火災となっているな
まぁ、森には被害がないように周りに水霊術をかけているから安全だ
「くっ、この程度の炎などすぐに抜け出せる
俺はグレズ様やあの方の１番の側近の男なのだからな！！」
はぁ、なんか気迫で出て来たし
それからなんだか触角っぽいもので切ろうとしてきたし
「…はぁ、だるい
そろそろ終わらせるか
術式３５番　武器召喚術ーアームズ・ホール」
中からさっき向こうで使った２本の槍でいいか
……はぁ、とっさに１本の槍を後ろに向けて構えて良かった
後ろに剣で俺を倒そうとした虫けらがいるからな
「ローチ様！？何故出て来ているのですか！？
こいつは私が相手するので、休憩しておいてください」

「コイツハオマエデハカテナイ
ダカラオレガアイテスル」

片言かよ
こいつがリーダーか……なるほど、その力量があるな
俺と互角に打ち合ってやがる
こいつの胸元に槍を入れようとすると、すぐに剣で弾かれる
まぁ、こいつが俺を切りかかってきたら、俺も槍で弾いているけどな
だが、後ろで俺に攻撃をしている虫けらにいい加減見ずに相手する
のはキツクなって来たな
あいつを先に倒すか

「…くたばれ……くっ」

ちっ、リーダーが邪魔しやがって
はぁ、仕方ない先にリーダーの方を倒すしか手はないな
このやり取りをあいつがミスをするまでしないとあいつは倒せない

「…今だ……ちっ、かわされたか」

「オマエヨクヤル、ダガオレハマケナイ」

くっ、なかなかすきを見せやがらない
どうするか……

第１１話（後書き）

攻撃力で見ればホーンが勝ち
効果で見ればローチの勝ち
見た目は……引き分けかな？

第12話

視点　氷華（氷結界の破術師）

ベビーが抜け出してどっかに行っちゃったけど大丈夫かな？
お兄ちゃんは避難所に全然来ないね、やっぱり怪我がひどいから来れないのかもしれないね
モノロフはボクと一緒にいるから大丈夫だけど……窓から外みようかな
誰が来るか分かるもんね

外は……黒い雲？
あっ、違うあれは……インヴェルズ！？どうしているの！？ヴァイロンに倒されたのじゃないの！？
ウィンダールさんがどこかに走って行ったね
イグルスだったかな、その子の元に行ったのかな？
でもそれだったら早く行かないと間に合わないよ！！
って、誰かがドラゴンに乗って、行っているね
あれは……お兄ちゃん！？何やっているの！？
……もう大丈夫なんだ……ギャラドボルグ？を放てるほど回復したのだね
その調子ならインヴェルズが撤退すればまた旅に出れそうだね

うわぁ、更にインヴェルズが増えちゃった……
でもウィンダールさんや他のガスタの人がいるから大丈夫だよね？
あれ？今横を何かが通り過ぎたような……あれはリチュア！？どうしてここに？
まさか、今弱っているところをついてガスタを乗っ取るつもりなの！？

……でも違うっぽいね、巨大なワニさんが自分で作った水弾をインヴェルズに当てて倒しているもんね
それと、エリアルさんと他の2人が変身……怪物に変身した……
えっ、ちょっと待ってよ！！
エリアルさんともう1人の足が魚になっているよ！？
もう1人の方は怪物そのものになっているし！！
でも胸についているのは何かな？ヴァイロンかな？
たしか、ヴァイロンに協力した5種族にヴァイロンを渡したのだっけ？
それでつけているのかな？

と色々見ている間にお兄ちゃんが奥にある森の方に行ったね
向こうに何かあったのかな？

お兄ちゃんが森に行ってから数分たったね
数が減ってきたからそろそろ終わりそうだね
えっ！ウソでしょ！！数が最初せめて来たのと同じくらいのが来たよ！！
インヴェルズって本気でここを落とそうとしているね……大丈夫かな……

視点　ルア

何回剣と槍の打ち合いをしただろうか？
後ろは剣と触角の打ち合いだが
まぁ、後ろはベビーがどこから来るか教えてくれないと対処しにくいが

「オマエ、キョウハココマデダ
グンノカズガヘッタコレイジョウツヅケルトオレタチガアブナイ
ココヲオトセテモホカノブゾクガキタラタイショデキン、ダカラホーンタノンダ」

「はっ、仰せのままに」

ちっ、追いかけたいがこっちは怪我をしているからな勝てるか分からないな
ギャラドボルグ？を撃ったから魔力も十分減っているしな
戦場にいたインヴェルズも撤退しているっぽいな
じゃ、俺も戻るか
奴らも森の闇に溶け込んでいったからな、不意打ちされるとまずい

「ベビー、憑依装着
さぁ、戻るか」

で、ガスタに戻ると変なことが起きていた……それは……

第１２話（後書き）

中途半端ですがここでおしまいです！
次はいつ更新できるかな？
ネタはまだあるのだけど暇がない！

それとＤＴにリチュアがまた増える！早くＧＥＴしたいな～

第13話

視点　ルア

はぁ、ガスタの村に着くと何故こんな事が起こっている……

「ルア、私の娘のウィンダとリチュアのそこのエリアルのどっちがかわいい？
今多数決をしてな、同点なんだ、だからだのんだ」

……はぁ、だるい……

「…どっちにも興味ない
勝手に決めてろ」

「おいおい、決めよーぜ！！ルアよ！！これはリチュアとガスタの因縁の対決なんだ！！」

「…だから興味ないと言っているだろ」

「よし、だったらウィンダール、こいつが気に入りそうな奴を全員だすか？
私はエリアルとエミリアを出す」

「ふっ、私の出番だわね、この世界で1番のノエリア様が出てあげるわ」

「「帰れババァ！！（怒）」」

ウィンダールとヴァニティって妙に息があっているよな……

「その話乗った、私はウィンダとカムイとカームを出す」

「ウィンダール、ボクは男と言っているだろ！！」

「な、なんだと！？
ムスト本当なのか！？」

「……（親のくせに知らなかった人）」

「…親バカ共は黙れ」

親のくせに性別を知らないとはどういう事だ……
そういえば、誰か忘れていないか？

「ちょ、ちょっとウィンダール！！私を呼ばないとはどういう事よ！！」

「いや、だって胸が……いや何でもない」

ウィンダールが言っている最中にオーナーが踏まれた
そして地面に埋まっている……こいつ苦労人だな

「そ、そんなにピリピリするな！！お前は秘密兵器だ！！
だから名前を言わなかったんだ！！だから怒るな、リーズ！！」

すごい言い訳だ……
はぁ、なぜこんな事に巻き込まれるんだ……

「「さぁ、この中で誰だ！！」」

「…はぁ、興味ないって言っているだろ」

「あっ、お兄ちゃん
さっきインヴェルズと戦っていたけど大丈夫なの
傷跡がまた開いたりしていない？」

モノロフに乗った破術師が来た
そういえば、怪我していたな
このバカ共のせいで忘れていた

「ま、まさか、お前はそいつを心に決めた人だから選べないという
訳でないよな！？
い、妹に恋をするというそんなゲームみたいな話じゃないよな！！」

……はぁ、バカ共が変な妄想をしだしたし……
そのゲームみたいな事をしている奴らが実際にいるのだけどな

それから破術師はなんかあたふたしているし……

「…はぁ、こいつは妹じゃなし、心に決めた奴じゃない
ただの旅の仲間だ」

それを聞くとウィンダールらは安心した顔になったな
で、なぜ破術師は落ち込んでいる？

「よし！じゃ、この中で誰だ！」

またこの話か……

「…はぁ、興味ないと言っているだろ

それからこんな事をしていていいのか？
次いつインヴェルズが攻めてくるのか分からなんだ
できるだけ早く対処できるように戦術を決めたりしないとダメなのじゃないのか？
今、ガスタとリチュアがいるんだ
２つの部族が共同して今回は戦えたんだ、それを生かすか殺すかはお前らが決めればいいが」

ローチだったか？
『今日はここまで』と言っていたんだ
その事から考えるとまた来るという事だ

「くっ、言われてみればあんなに大量の軍がまだ残っていたんだ
今回はリチュアがいたから何とかなったかもしれない
ルアが言う通りにするか……」

「…今日は俺はここに泊まるがいいよな
明日出ていくから風の塔の場所を教えてくれ」

やっと傷が元に戻ったんだ
今日ここで泊り、髪の手入れをできなかった分もしなくてはならないで、明日明るいうちに闇の国に入り出る

「あぁ、いいが本当にいいのか？
まぁ、カームに見て貰え」

……はぁ、あいつに診断されるといやな事しかない気がするのだが

……

まぁ、いいか、明日出ていくのだから

第13話（後書き）

……なんかどうしてもルアがフラグを立てている気がしてならない……

気のせいかな……？

それからなんか今回もグダグダな回だったな……

ガスタとリチュアどっちが人気あるのかな？

それからガスタは誰が1番人気なのかな？サンボルトだったりして（笑）

第１４話（前書き）

どうしよう、公式でリチュアがラヴァルを吸収しちゃったよ！！
何やっているの！？今まで考えていたストーリが……
これからどうしようか、このまま公式を無視して進めるか
公式に従うか……

そういえば、ヴェルズっていたな……
ああ、それの設定も考えないと！！

それと、この回なんだったんだろう？

第１４話

視点　ルア

夜が明けたか
そろそろ起きるとするか
髪の手入れも終わらし、昨日のうちにウィンダールに風の塔の場所も聞いた
闇の塔の場所はまだ分からないが何とかなる事を祈ろうか
ベビーらはまだ寝ているか……少し外に出るか

……いい静寂だ
風の音がするくらいで他の雑音が全くしない
久しいなこの静寂は……

「おっ、ルアじゃねーか！！もう起きていたのか！！」

……はぁ、うるさいやつらに見つかったか……
アビスと誰だ？剣をつけているという事は剣士か？

「…あぁ、静寂と楽しんでいた、でそいつは誰だ？」

「こいつはアバンスだ！！お前とちょっと性格が似ている奴だ！！」

はぁ、性格が似ている？少しでも嫌だな

「ほぉ、そなたもこの静寂を楽しんでいたのか
私も楽しんでいたところとこのアビスにより邪魔されたのだ
邪魔されてはする事がなくなるであろう

なのでな今アビスとふらついていたのだがそなたとあえて良かった
一度、話をしたかったのだ」

……なんだか事情説明をしてきたのだが……
俺と性格が似ている？似てないだろ……俺の勘違いか？
で、俺はこいつの事を知らなかったのだが、こいつは俺の事を知っているのか
暇だし話でもするか

「…話とはなんだ？」

「そなたの杖を見ると剣を忍ばしているであろう
それが同じ剣士をして気になってな
最近、剣を使う者が少なくなっていてな、珍しくて話をしてみたかったのだ」

「…誰がそんな事を聞きたいと言った
話をしないなら行くぞ」

「そんなに怒らなくては良いでないか
怒ってばかりいれば人生がつまらなくなるぞ」

……何故こいつに人生の心配をされなくてはならない

「その剣を見せてくれぬか？
剣は持ち主の心をうつすのでな」

……はぁ、こいつは剣の事を結構詳しそうだからまぁ、見せてもいいだろう

「…ほら、見ろ」

「ほぉ、きれいな剣だ
だが、光の中に濃い闇が見える
そなたは何やら人に言えぬ闇を持っておるな
その顔を見れば間違ってはいないな」

……いつ心理テストになったこの話は……
俺の闇か……あれは俺自身の問題だ

「…俺の闇を暴いてどうするつもりだ」

「いやいや、人は誰だって闇を持つものだ
だが、そなたは周りがきれいでな、闇が目立ったので言ってみたのだ
剣を見る限りそなたはいい人柄だ
私が思っていた人物でなりよりだ」

「…話はそれだけか」

はぁ、剣で人柄を見るとはどんな才能だ

「剣は良い、物騒であるが、人の本質をうつしだす鏡のような物だ
そなたもそう思うだろ？」

……こいつ、剣マニアか？
俺が剣を使っているから話が合うと勝手に思いこみやがっている

「…興味ない
剣は剣、ただそれだけだ」

「それは嘘だ
そう思うのならその剣はそこまできれいにならぬ
そなたは自分に正直になったらどうだ？
そうでないと連れの者に負担がかかるぞ」

「…もういいだろ、俺は戻る」

ちっ、聞いていれば好き勝手に言いやがる

視点　アバンス

少し言い過ぎたかもしれぬな

「アビスよ、彼は自分に厳しいな」

「ん？何だ？それも剣で見たのか？」

「それもあるが、話していても分かる
剣に余計な感情を入れてはならないとし、自分の感情を押し殺している
それが剣だけにはまるとは思えない、他のものにも当てはまるだろう」

「そうかもしれないな、お前とは正反対だから似ているな」

「正反対だから似てはないだろう」

「ははっ、そうだな！！」

視点　ルア

はぁ、結局あいつらはなんだったんだ？
ん？あそこにいるのはカームか……何やってんだ？

「…おい、何やってんだ？こんな所で」

「ルアさんですか、私はただ薬草をとっていただけですが」

……言われてみれば、この前見せられた草に似ているな

「…普通に呼び捨てで構わん
それよりも、今日で退院しても構わないよな？」

「えぇ、別に構いませんよ
ただ、１つ条件があります」

……条件？
俺に求める条件は何かあるか？

「私もあなたの旅に連れていくことです」

「…何故？
俺の行動をガスタに報告するためか？」

「いえ、あなたの傷はまだ完璧に治っていないのですよ
だから私が一緒についていくのです」

「…それだったらその薬を俺に渡せばいいだろう
それとも他に何かあるのか？」

「えぇ、今里が大変な時期と分かっているのですが、この旧国から
出たいのです
それが昔からの夢でして
あなたは新国に戻るのでしょ、だったら一緒に連れていってくださ
い」

……何故俺が新国から来たと知っている？
こいつには言っていないはずだが

「氷華さんからそう聞いたのですが違いましたか？」

……あいつか

「…そうだ、まぁ、ついてくるくらいならいいだろう」

「そうですか、ありがとうございます」

はぁ、旧国には奴らを解放しに来たのにな
何故俺の周りに人が増えていく？

第１４話（後書き）

Ｑ　アバンスとルアって性格似ている？
Ａ　気のせいでしょう

Ｑ　氷華の性別結局何にするの？
Ａ　ちょっとやりたい事を見つけたので女にします
　キャラ設定の方も女に変えて置きます
　ん？男って噂？気のせいだろう

タッタラーン！
ルアはカームを仲間にした！

だからこれって仲間ＧＥＴの旅になってきているよね……

第１５話（前書き）

久しぶりの更新です

第15話

視点　ルア

……はぁ、カームを連れてベビーらのもとに戻ったら
ウィンダールが寝ている破術師の近くにいた、息を荒くして

「ルアよ、遅かったな」

「…そいつから離れろ、ロリコン」

といい蹴り飛ばす
ウィンダールはきれいに壁まで飛んで行った
カームもウィンダールをまるでゴミを見るかのように見ていた

「る、ルア！誤解だ！！」

「ウィンダールさん、じゃ何をしていたのですか？
自分の娘じゃ飽きて……」

「ち、違う！！そんな事言うなカーム！！変態と誤解される！！
（そのような目で見ていただきありがとうございます！）」

……今更だと思うが
それにしても、破術師はこの中でまだ寝ているのかよ
ベビーとモノロフは起きたぞ

「…おい、結局なにをしようとした？」

「別れぐらい見送ろうとしたのだが、いなくてな
で、氷華が寝ていたから寝顔を拝見して……」

「…そこから何をしようとした？」

睨みつけると、目をそらされた
だが、そらした方にカームが睨んでいた
何故かウィンダールが喜んでいるように見えた

「いや、ただ単に誰も帰ってこないのなら裸で私も一緒に寝ようかと……って剣を出すな！！
冗談だ！！ジョーク！！ジョーク！！」

「ルアさん、冗談みたいので許してあげてください」

くっ、邪魔をされたか……「チッ」と舌打ちをし、剣をしまう
後少しでゴミを駆除できたのにな
まぁ、今の騒ぎで破術師が起きたからいいとしよう

「起きたか、さっさと用意しろ
…ウィンダール、外に行くぞ
カーム後は頼んだ」

カームは「はい」と言い寝ぼけている破術師の所に行った
「何故外に出ないといけない」と言っているゴミを窓から蹴り飛ばす
その後に俺も飛び降りる

……

……
……

外で破術師を待っている間、ゴミがある事を語ってきた

「いいかルア、さっき君は私をロリコンと言ってきた
その通りだ、私はロリが大好きだ
特に小学生のスクミズを見れいればハァハァするし……」

と言う事から始まり
今までずっと話している
全く相手にしてないが
親バカにロリコン、そしてM疑惑が出ているのだが
ガスタって大丈夫なのか？

「大丈夫だ、問題ない」

語っていたのじゃないのか？何故、俺の心を読む？
…破術師とカームが来たな
取りあえず破術師が来て目が輝いたゴミを蹴り飛ばすか

「…ウィンダール、今まで世話になった礼を言う」

と、踏みながら言う
こいつが暴れないようにな

「これが礼をいう時の……いえ、何にもありません、お役に立ててありがとうございます

（くっ、男に踏まれてもうれしく無い
出来ればウィンダかカームか氷華が良かった）」

ゴミが何かを言うから見たら、ゴミからも礼を言ってきたな
ふっ、以後精進することだな

「じゃ、行くぞ」

そうして平和に里を出ていけると思えば……
背後から声が聞こえてきた
赤髪のおばさんが話してきた

「くくっ、ウィンダールいいざまね」

「何だ？お前はリチュアのノエリアか
リチュアも里に戻るのか？」

「戻る？寝とぼけて？
ここがリチュアの領土となるのよ！！」

ほぉ、やはりそう来たか
ガスタも大変だな
俺は関係ないから巻き込むなよ

「な、何！？」

「マインドオーガス！！ガストクラーケ！！里を制圧しなさい！！」

エリアルかあれ？
まぁ、水色の髪の少女という事しか分からなかったから分からない

が……
足が無くなり、巨大な魚のような生き物が生えているな
もう1つの方も、赤髪の少女の下に巨大なタコかイカが生えている
まぁ、どうでもいいか
それにしてもあの2人、意思がないみたいだったな
あのノエリアだったか？あいつが催眠術をかけて操っているのか

「や、やめろ」

「ふっ、みじめねウィンダール
私の下僕となるのだったら止めてあげてもいいわよ、そこの坊やもね」

「熟女には興味ない（キリッ）」

「くっ、まぁ、いいわ
そこの坊やはどうするの？」

だから何故俺を巻き込む？
まぁ、いいだろう答えてやろう

「…寝ぼけているのはお前じゃないのか？俺がお前の下僕？笑わせるな
お前が俺の下僕となるのなら話は受ける
それに俺はガスタがどうなろうと興味がないが、俺の邪魔をするならガスタに手を貸す
お前にとって都合がいいのはどっちだ？」

「ふっ、ガキが一人増えても問題ない
この美人なお姉さんが「…ギャラドボルグ」な……」

ノエリアが何か言ってきたが、俺との交渉決裂だったのは明らか
ノエリアの顔のすぐ隣を撃ってやった

「…これでもか？
今のはわざと外した、邪魔をするようだったら次は当てる」

「このクソガキが！！」

ノエリアがキレた
そして首に下げていた鏡のようなものから出ている光を自身にあて、
変身した
なにやら怪物のようなものになった
そして近くで漂っていたヴァイロンらしきものを体に装備した

「…交渉決裂か」

とため息を吐いていると

「おいおいルア！！そんなのであきらめるのか！？」

といい、アビスとヴァニティとアバンスが来た

「…くっ４人を相手か
ウィンダール動けるか？」

「あぁ、私も戦える」

「…いや、氷華達を安全な所に連れて行け
４人相手だと流石に邪魔だ」

「おいおい！！俺たちを敵だと思っているのか？」
「せっかく助けに来たのに酷いね
ウィンダールもこんな所で倒れていればまた話できないじゃないか」
「そういう事だ、ルア殿
私ら3人はお主たちと共に戦う
他のリチュアはエリアル嬢らを助けている」
……なるほど、これはノエリアが勝手に起こしたことなのか
はぁ、リチュアめ、危険な人物くらい監視をしておけよ
「ふふっ、ヴァニティ
私が今まで何も用意もせずに起こしていると思っているの？」
「どういう意味だ！！」
「これを見ればわかるわ、チェイン！！」
「……」
一言も発せずに炎に包まれた海竜が来た
リチュアは炎を持つ奴もいるのか？
「こ、この炎は私らと共に戦ったラヴァルの炎か！？
女狐！！お主！！ラヴァルを！？」
「そうよ！儀式の生け贄にしたわ！！
さぁ、あなた達も私に協力しなさい」

「仕方ねーか」

「そうだね」

「こうなってしまっては仕方ない」

ふっ、リチュアがガスタに全軍突撃させるのは目に見えたな
俺はこの里から出るか

「リチュア全軍に次ぐ
我々リチュアはエリアル嬢とエミリア嬢を救い、ノエリアを撃つ！！
そしてガスタの里を守れ！！」

……はぁ、こんなバカがいるのか
この状況を見れば誰もがガスタを攻めるというのにな
仕方ない、俺も手伝うか

「カーム、モノロフと氷華を頼む」

「はい、気を付けてくださいね」

カームがモノロフと破術師を連れて行った
それを見届けて、バカ共に言う

「…お前らだけじゃ弱い、俺が手伝ってやる」

「なんだよルア！！お前さっきビビっていたくせに！！」

「アビスよ、そなたは勘違いしている
ルア殿はビビってはいなかったぞ」

「…という訳だ、勘違いもほどほどになアビス
で、あいつを潰せばいいのか？」

リチュア3人組がうなずいたな
じゃ、簡単に済ますか

「…儚く散れ
ギャラドボルグ？」

光の波動で生成した矢を放つ
あの怪物は何か防ぐという動作を行わなかった
これで終わりだな

「あらあら、坊やこんなもの？」

「！？」

な、無傷だと！？

「ルア、無傷なのは仕方ない
何人のラヴァルを生け贄にしたのか分からないが、大勢だろう
そのうえ、ヴァイロンをつけているのだ
あれほどの攻撃でもそれらが組み合さった壁の前では赤子のような
ものだよ」

チッ……きついな
ギャラドボルグ？が防がれると俺も手の出しようがないぞ

「…何か手はあるか？」

「今の所は無い」

「あぁ、ガスタの方も無い」

ヴァニティとウィンダールが戦力不足という事を言ってきた
仕方ない、アンデットを倒すために封印をといたあいつらを呼ぶか？

「ヴァニティよ、方法ならある」

「本当か？アバンス」

「あぁ、私が儀式を成功すればいい」

「だ、だがシャドウがいないのだぜ！！
シャドウがいれば全てシャドウがまかなってくれるが、今は誰がするんだ！？
まさかノエリアみたいにするって言わないよなアバンス！！」

「ふふっ、アビスよ
私があのような事をすると思うか？
私はこれを使う」

といい、金色の鏡を見せて来た

「これは写魂鏡か
ってお前、命を使うのか！？」

「あぁ、シャドウがいない今、こうするしかないであろう
まぁ、シャドウがいても私はこうするが」

「でもアバンス、神と契約はできたのかい？」

「いや、これからする」

「無茶だ！！失敗すればどうなるかわかっているだろ！！」

「…おいお前らどうするのか早くしろ
お前らが話している間、光の護封剣であいつの動きを止めているが
そろそろタイムアップだ」

こいつらが話している時に怪物が襲いに来たから発動したが
このままじゃ、無意味になる、早くしてくれ

「写魂鏡発動！！くっ……」

金色の鏡から出た光がアバンスを取り囲む
その光がアバンスのエネルギーを取り込んでいる
って、これは危なくないか！？

「…エネルギーの吸収が不規則すぎる
おい、お前らも手伝え、一定の量に調節するぞ」

ここにいる全員の魔力で一定に保つように強制的にさせる
その結果で何とかなったようだ
だが、その反面、怪物がこっちの思惑に気づき護封剣を早く壊そう
としてきた

視点　アバンス

「写魂鏡発動！！くっ……」

やばい、吸収される量が一定に保てない
まずい、このままだと失敗する！！

……一定に保った？
あぁ、ルア殿か
そなたの目が鋭くて助かった
後で礼を言わないとならないな、まずはこれを成功し女狐を倒さなくてはならぬ

「気づいたか？」

いつの間にか違う所に来ていた！？
目の前にいるこやつは何者！？
龍の姿をしているが……

「お主は何者だ？」

「面白い事をいう
そっちから来ておいて、我の名を問うか
良いだろう、我の名はリヴァイアニマ、お主らが崇める神の一人だ」

……成功したのか
いやまだだ、こうなったかには契約をし、こやつの力を得る

「すまない、少し記憶の整理ができてなく無礼なまねをした
私の名はアバンス
単刀直入に言う、そなたの力を貸してくれ」

「良いであろう
我も我らの同士が操られているのを黙っているわけにはおけなくてな
共に行くぞアバンス」

……
……
……

「…アバンス、成功したのか？」

戻って来れたようだ

「あぁ、そなたのおかげで助かった」

「…光の護封剣も限界だ、頼む」

ふっ、そなたの性格で人に頼むとは
写魂鏡を空に投げる、そうすると鏡の部分が私を包む

「我が魂を生け贄にイビリチュア・リヴァイアニマ降臨せよ」

視点　ルア

「我が魂を生け贄にイビリチュア・リヴァイアニマ降臨せよ」

そうアバンスが言うと奴を包んでいた光が更に大きくなった

その後、光をかき消すかのように翼が飛び出し、剣を持った龍が出て来た

「私とリヴァイアニマの意思、それは女狐、貴様を倒しリチュアをもとに戻す！！」

第１５話（後書き）

気力が尽きたのでここで終了
次の更新はいつになる事やら……
恐らく、１２月中に１、２回は更新します

Ｑ　シャドウはどこに行ったの？

Ａ　リチュア全員がガスタの里に来る前にヴェルズ化してどこかに……

Ｑ　シャドウがいればどうなっていたの？

Ａ　シャドウがいれば、儀式はもっと簡単になったし、
写魂鏡を使わなくて良かった

Ｑ　シャドウを使えば、いなくなるのじゃ……

Ａ　オリ設定ですが、リチュアはただでさえ少ないのに、
儀式で数を減らせばここまで生き残れないと考え、
シャドウは生け贄にされてもずっと残ると考えています

Ｑ　ヴィジョン使えよ

Ａ　後になって気づ来ました
まぁ、シャドウさんみたいに無敵にはならないと言う事で、
無理と言う事にしました

Ｑ　チェインってあいつだよな？

A　はい、ラヴァルバル・チェインです

Q　ウィンダールェ……

A　最近ウィンダールが変態にしかイメージできないこの頃

Q　ルアって氷華（破術師）の事が……

A　全く何とも思っていません
ただ、ウィンダールから守ったのは、
一緒に連れて行くと決めた以上、傷付けたくないからです

Q　神との契約？

A　設定でリチュアは数あるリチュアの中にいる神と契約をし、
儀式で契約した神と融合して、イビリチュアとなる事にしています

分からない又はややこしい設定がありましたら感想にお書きください！

番外編　その３（前書き）

少し番外編が書きたくなり番外編
ちょっと重要であったりなかったり……
では、どうぞ！！

番外編　その3

ルアと破術師らが水の国を出たのと同じ時刻、別の場所で戦いが起こっていた
太古に封印をしていた龍を目覚めさせた一族とその龍との……

『トリシューラが攻めて来た！！応戦する！！』

忍者のような服装の男性、水影が連絡をする
それを聞いたその時……

「水影、こっちにも龍が攻めて来た……グングニールだ
こちらも応戦する」

冷静に水影に連絡する帽子がトレードマークの男性、術者
だが、彼から流れ出る汗が知らずと緊迫感を語っている

『隊長！！ブリューナクは封印を完了しましたぁ！！』

と、赤髪のツインテールの少女が、風水師が術者に連絡が来た
3体いる内の1体の龍、1体減った
これで3体の奇襲などが無くなったが、後2体……

「よし、風水師よ順に封印を急いでくれ」

「隊長、グングニールがもう目と鼻の先にいるのですから、のんき
連絡しないでください」

と、風水師とは別の首にマフラーを巻いたツインテールの少女、舞姫がそう忠告する
彼女が言った通りにもうすぐそばまで来ていた
一方トリシューラの方は、水影の陣が持ちこたえている

皮肉だが今現在、氷結界の数は少ない
龍と同等の力を持つ、氷結界で名を持つ人、ガンダーラ、グルナード、ライホウがいない今
戦力的に低いのは目に見えている
今いる連中は、術者を中心に集まった寄せ集めに過ぎない
他の者は以前の戦争で亡くなったか、もしくは破術師のように違う場所に行っているか
だから、彼らはこれ以上減らさないため、龍を再び封印することにした

「術者様、例の物が完成しました!!」

と、膝あたりまで伸びる薄い緑色の髪を持つ女性、交霊師が鏡を持って来た
その鏡の周りにまるでトリシューラの頭をイメージしたようなものがつけられていた

「間に合ったか
よし、水影のもとに持って行け
護衛を何人かつけて行けよ」

先ほどの鏡は氷結界の鏡、前回トリシューラに使用したが無意味だった
しかし、交霊師が独自に改良したことにより対策はできている

これで後の問題は術者の陣と交戦中のグングニールのみとなった

「水影、聞こえるか？」

『な、何だ！？
今こっちは忙しい！！
くっ、レイス負傷したなら封魔団に診て貰え！！
術者、要件は早く言え！！』

電話越しでも分かるほど向こうはトリシューラとの応戦に苦しい

「交霊師が鏡を持って向かった
その鏡を使えばトリシューラには効果的だ、使えば早く封印を頼む」

『あぁ分かっている
だが、そこまで持ちこたえられるか分からん
くっ、もう連絡は無理そうだ、俺も出る』

といい水影との連絡は切れた
だが、術者も先ほど舞姫に忠告されたようにのんきに連絡をしてい
い暇はない

「俺もそろそろでる
舞姫、怪我人の医療を頼むぞ」

舞姫の「はい」という返事を聞き術者も出て行った

……

……
……

一方水影の陣は、残念がことながら水影のみとなった
交霊師の到着までは後数分かかる
常識的に考えて不可能だったが……

「水影、俺の不在の間にここまでしてくれて助かったぞ
ここから先は任せろ俺、虎将の一人ガンターラにな」

といいスキンヘッドの武人が現れた
左手に氷のような気を集めいつでも戦えるように構えている

「ガンターラ様、交霊師が来るまで持ちこたえてください！！」

「おいおい水影、俺がそこまで持たない気がするか？
別にアレを倒してしまってもいいのだろ？」

と不敵の笑みで水影に言う
そして、トリシューラの懐に入り攻撃をする
トリシューラは一瞬の事で倒れかけたがすぐに立ちなおした
そして、怒りを露わにした

「ははっ、やっと本気になったか
ほら来いよ」

周りが見ればどう思うだろう
氷結界の龍で最強と言われているトリシューラに生身の人間が挑発

している
バカげているが普通か？いやこれが普通か？
どっちにしろ、この人物にとってこれが普通らしい

「――――――――――――――――――――！！！！！！！！」

一瞬トリシューラが咆哮を上げた
次の瞬間、トリシューラの後ろから岩石ほどの大粒の氷がガンターラに向かいものすごい速さで降ってきている
だが、ガンターラは不敵の笑みを止めず突っ立っている

「ガンターラ様！！危な「水影、そこから動くなよ」えっ？」

といい、全ての氷を拳で落としていった

「おいおい、最強の龍ってこんなもんか？」

また挑発をするガンターラ
そうしている間に交霊師が辿りついた

「はぁ、もう着いてしまったか……
仕方ない交霊師、後は頼むぞ」

と言い、ガンターラは後にする
そして交霊師が鏡を使う

「鏡よ、トリシューラを眠らせよ！！」

鏡から出た光がトリシューラを包み込む
そして数十秒たった時トリシューラの体が倒れこんだ

「鏡よ、トリシューラを封印せよ！！」
またトリシューラを光が包み込む
そしてトリシューラが消えた否、封印されるべきところへ行った
ブリューナクも鏡は使ってないが同様に先に封印された

……
……
……

ガンターラが去ったのと同時刻、大怪我をした術者の所に2人の人物が現れた
大剣を背負い、氷で出来た鎧を着たグルナードとまるでチャイナ服のような服を着たライホウ
「無限の剣グルナード、虎将の名の下に貴様を封印する」
「ハハハ、ガンターラもあなたもそういうの好きですね」
「グルナード様、ライホウ様、後は頼みます」
「はい、ここは私たちに任せ治療を受けて来てくださいね」
と言われ術者は舞姫の所へ戻る
そして、グルナードが氷で出来た剣を後ろに待機させている

二つ名通り、無限に近いほどの数がある

「ライホウ、いつも通りで行くぞ！！」

「はいはい、あなたが暴れた後、私の魔法で眠らし怪我を直し封印するという事でいいのですね？」

「おうっ！！
無限の剣、放出！！」

（どうせいうのならば、もっとかっこよく言えばいいのに
まぁ、厨二臭いのは仕方ないでしょう）

グルナードが攻撃をし、グングニールを気づつけたところをライホウが技目等言わず魔法を放つ
そして、封印をした

「よし、これで終わりだな
ガンターラからトリシューラの封印は終わったと連絡が来たしな」

「そうですか、では我々も戻りましょうか」

と言い戻っていく
その姿をある虎が見ていた

「ふん、お前らが龍の力が欲しがったと思えば、次は用済みか
これだから……はぁ、もういいか
それより私はどうするか、彼との連絡が途切れた今する事がないのは仕方ないな」

番外編　その３（後書き）

グルナードが厨二病を……
どうしてこうなったのだろう……

最後に出て来た虎はドゥローレンです
あのセリフを言わせたかったのでちょっと満足です

『彼』はまた番外編を書いた時に分かると思います
ばれていないよね……？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5151v/

龍と共に

2011年12月19日17時47分発行